松島大原遺跡

平成６年度箕輪町土地開発公社公園墓地造成
工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1995年

長野県上伊那郡箕輪町土地開発公社
上伊那郡箕輪町教育委員会

松島大原遺跡

平成６年度箕輪町土地開発公社公園墓地造成
工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1995年

長野県上伊那郡箕輪町土地開発公社
上伊那郡箕輪町教育委員会

17号土坑出土土器

1号住居址出土墨書土器

序

箕輪町は、東西の山々を源とする中小河川と、それらが流れ込む天竜川によって形成された河岸段丘に代表される、伊那谷の北部に位置しております。これら河川の周辺には、水と魚などの食料を求め、遙か先史の頃より人々が暮らし始め、現在の箕輪町に至っています。中でも町の北西部を流れる深沢川の両岸は、古くは縄文時代からの遺跡が密集する所であり、松島大原遺跡もその一つに数えられます。

昭和48年度、長野県教育委員会により、中央自動車道西宮線建設工事に先だつ緊急発掘調査を実施した堂地遺跡が、本遺跡の東側に位置しています。その調査では、縄文時代、奈良・平安時代を中心に、住居跡を始めとする遺構の数々が検出され、当時の生活を物語る土器や石器などの貴重な遺物が豊富に出土しています。本遺跡は、この堂地遺跡に非常に関連性を持ち、深沢川右岸遺跡群の中でも重要な箇所と言えるでしょう。

今回は、町土地開発公社が行う公園墓地造成事業にあたり、町教育委員会が実施した緊急発掘調査の報告書であります。今までと同様に、学術的に貴重な資料を収めることができました。その内容につきましては、本書の中で詳細に記してあります。多くの皆様に広く活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、深いご理解とご協力をいただきました、町土地開発公社並びに地元の松島区、そして調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会
教育長　堀口　泉

例　　言

1．本書は、長野県上伊那郡箕輪町中箕輪11,217番地３他に所在する松島大原道遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は、箕輪町土地開発公社より委託を受けて、箕輪町教育委員会が行ったものである。平成６年７月18日から10月７日まで現場作業を、10月８日から７年３月20日まで整理作業及び調査報告書の作成作業を行った。

3．本書を作成するにあたり、作業分担を以下のとおり行った。

遺物の洗浄・注記－漆山美晴、大串久子、百瀬千里

遺物の接合・復元－福沢幸一

遺構図の整理・トレース－赤松　茂、漆山美晴、根橋とし子、丸山あゆみ、宮脇陽子

遺物の実測・トレース－大串久子、根橋とし子、宮脇陽子、百瀬千里

挿図作成－赤松　茂、浦野美幸、漆山美晴、根橋とし子、百瀬千里

写真撮影・図版作成－赤松　茂、池上賢司、後藤主計、北條昭芳

4．本書の執筆は、赤松　茂、根橋とし子が行った。

5．本書の編集は、赤松　茂、浦野美幸、漆山美晴、大串久子、池上賢司、後藤主計、根橋とし子、樋口彦雄、福沢幸一、北條昭芳、丸山あゆみ、宮脇陽子、百瀬千里が行った。

6．出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

7．本調査及び本書の作成にあたり、各機関並びに個人の方々にご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

機関－松島区、（財）長野県埋蔵文化財センター、箕輪町土地開発公社、上伊那西天竜土地改良区

個人－助川朋広、小平和夫、友松　諭、福島　永

凡　　例

1．遺構実測図は、次の縮尺に統一した。
　住居址・掘立建物址・ロームマウンド－１：６０、カマド・土坑・ピット・火葬墓－１：４０
2．遺物実測図・拓影図は、次の縮尺に統一した。
　土器実測図－１：４、土器拓影図－１：３、鉄器実測図－１：２
3．土層及び土器の色調は、『新版　標準土色帖』を用いて記してある。
4．土器の接合状況は、観察できるもののみ断面に表示してある。
5．遺構実測図中におけるスクリーントーンの表示は、次のものを表す。

焼土　炭化物付着　石断面　●土器　△鉄器

7．土器実測図中におけるスクリーントーンの表示は、次のものを表す。

須恵器　土師器内面黒色処理

8．土坑及びピットの一覧表の法量は、上から長径・短径・深さの順に記し、単位はcmである。
　また、現存する数値は（　）で、－は計測不能を表している。
9．出土土器観察表の法量は、上から口径・底径・器高の順に記し、単位はcmである。また、
　現存する数値は（　）で、－は計測不能を表している。
10．出土鉄器観察表の法量は、上から長さ・幅・厚さの順に記し、単位はcmである。重さの単
　位は、gで表している。共に、現存する数値は（　）で、－は計測不能を表している。

本　文　目　次

題　　字……団　長　樋口彦雄
　序　……教育長　堀口　泉
例　　言……
凡　　例……
本文目次……
挿図目次……
図版目次……
第Ⅰ章　発掘調査の概要……1
　第1節　調査の経過……1
　第2節　調査組織の編成……2
　第3節　調査日誌……3
第Ⅱ章　遺跡の環境……6
　第1節　自然環境……6
　第2節　歴史環境……7
第Ⅲ章　調査の結果……9
　第1節　調査方法と結果概要……9
　第2節　土層堆積状況……10
第Ⅳ章　遺構と遺物……11
　第1節　住居址……11
　第2節　掘立柱建物址……21
　第3節　土坑……23
　第4節　ピット……28
　第5節　ロームマウンド……30
　第6節　火葬墓……31
第Ⅴ章　まとめ……32
図　　版
報告書抄録
付　　図

挿　図　目　次

第１図　位置図……1
第２図　周辺遺跡分布図……8
第３図　調査区設定図……9
第４図　土層図……10
第５図　１号住居址実測図……12
第６図　１号住居址カマド実測図……13
第７図　１号住居址出土鉄器実測図……13
第８図　１号住居址出土土器実測図……14
第９図　２号住居址・カマド実測図……17・17
第10図　２号住居址出土土器実測図１……19
第11図　２号住居址出土土器実測図２……20
第12図　２号住居址出土鉄器実測図……21
第13図　１号掘立柱建物址実測図……22
第14図　土坑実測図１……24
第15図　土坑実測図２……25
第16図　17号土坑出土土器実測図……26
第17図　土坑出土土器拓影図……28
第18図　ピット実測図……28
第19図　１号ロームマウンド実測図、出土土器拓影図……30
第20図　２号ロームマウンド実測図……31
第21図　火葬墓実測図……31

付　　図

付　図　　全体図

表　目　次

第１表　周囲遺跡分布一覧表……7
第２表　１号住居址出土鉄器観察表……13
第３表　１号住居址出土土器観察表……15
第４表　２号住居址出土土器観察表……20
第５表　２号住居址出土鉄器観察表……21
第６表　土坑一覧表……27
第７表　ピット一覧表……29

図　版　目　次

巻頭カラー図版　17号土坑出土土器、１号住居址出土墨書土器

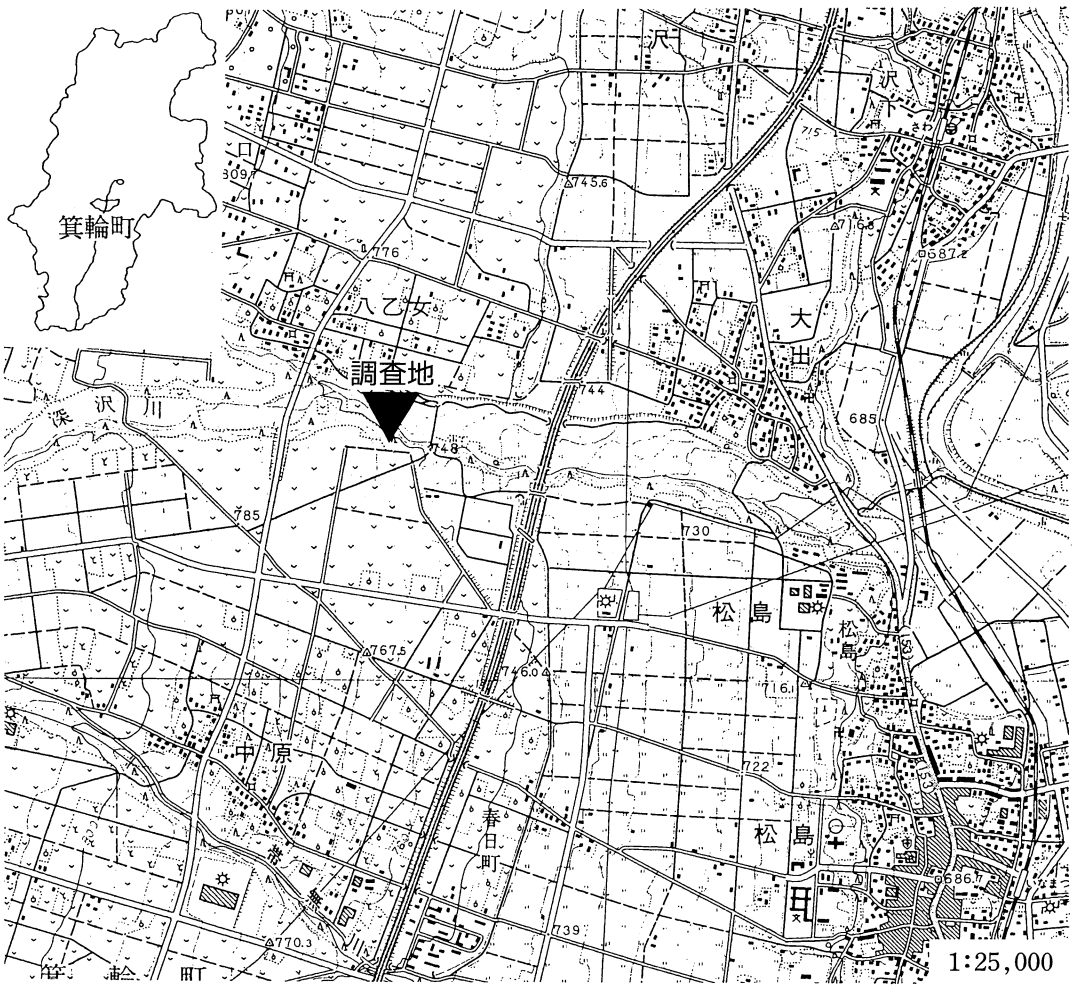
図版１　調査地近景（調査前、南東より）、調査地鳥観（東より）
図版２　土層堆積状況、１号住居址
図版３　１号住居址掘り方、２号住居址
図版４　２号住居址（拡張前）、２号住居址掘り方
図版５　１号住居址カマド、２号住居址カマド１(出土状況)、２号住居址カマド２(内部状況)
図版６　10号土坑、７号土坑、３号土坑
図版７　17号土坑遺物出土状況、17号土坑、１号ロームマウンド断面
図版８　１号掘立柱建物址、火葬墓
図版９　１号住居址出土土器、鉄器
図版10　２号住居址出土土器１
図版11　２号住居址出土土器２、鉄器
図版12　17号土坑出土土器、調査協力者

第Ⅰ章　発掘調査の概要

第1節　調 査 の 経 過

松島大原遺跡は、箕輪町松島地籍の北西部に所在し、天竜川に注ぐ中小河川によって形成された複合扇状地ほぼ中央部で、深沢川右岸の微傾斜地に立地する。深沢川の両岸は、集落址を中心とした、縄文、弥生、古墳、奈良、平安時代の複合遺跡地帯である。折しも、中央自動車道が本流路を横断するにあたり、その建設工事に先だち右岸は堂地遺跡、左岸は中道遺跡を発掘調査が実施された。その結果、両遺跡とも縄文、奈良・平安時代の大集落遺跡である事が判明し、特に後者の時代では、伊那谷北部を代表する遺跡の一つとして広く知られるようになった。

平成5年度に町土地開発公社は、将来的に展望した墓地の確保に対処するため、昭和48年度



第1図　位　置　図

に調査実績のある堂地遺跡狐窪調査地の西側継続地、面積4,000㎡以上の用地を公園墓地化する第一期計画を町教育委員会に提示した。両機関はそれに基づいて、過去の調査実績を踏まえた同開発地区内に包蔵すると予測される文化財の保護協議を重ね、新たに松島大原遺跡として命名し、調査による記録保存を実施する運びとなった。翌平成６年７月、両機関の間で発掘調査の委託契約が交わされ、町教育委員会は新たに調査団を結成し、同月19日より10月７日まで発掘調査を実施した。調査終了後、直ちに整理作業を開始し、平成７年３月30日を持って報告書の刊行に至った。

尚、調査地点は、上伊那郡箕輪町大字中箕輪11,217番地の３他、東経137° 58′ 10″、北緯35° 55′ 25″、標高760～765ｍに位置する。

第２節　調査組織の編成

調査主体・事務局

箕輪町教育委員会　教　育　長　堀口　泉
社会教育課長　大槻　丞司
副　参　事　柴　登巳夫（箕輪町郷土博物館館長）
副　主　幹　青木　正（同館職員）
主　　査　赤松　茂（同館学芸員－調査主任）
臨時職員　酒井　峰子
臨時職員　根橋とし子（調査員）
臨時職員　宮脇　陽子（調査員）

調査団

調査団長　樋口彦雄
調査主任　赤松　茂
調 査 員　福沢幸一
調 査 員　根橋とし子
調 査 員　宮脇陽子
調査団員　池上賢司、井上武雄、井上隆次、浦野美幸、漆山美晴、遠藤　茂、大串久子、大槻泰人、大槻茂範、岡　　正、金沢昭吾、久保田恭子、倉田千明、小池久人、小嶋久雄、後籐主計、小松美奈子、笹川正秋、戸田隆志、野村金吉、伯耆原　正、北條昭芳、堀　五百治、堀　美人、堀内昭三、Michaei.Wittmer、松田貫一、丸山あゆみ、水田重雄、向山幸次郎、百瀬千里、山口昭平、山田武志

第3節　調　査　日　誌

7月19日（火）晴
前日が雨天のため、調査の初日。調査区を、南北方向に8本のトレンチを設定し、大型重機で試掘を行った。

7月20日（水）晴
機材の搬入、事務所の設営、周囲の草とりを行い、町長並びに関係者の列席のもと、調査団の結団式を行った。また、昨日掘削したトレンチ内の遺構の有無と、土層堆積状況の確認作業を行った。

7月21日（木）晴
遺構範囲の確認後、重機にて表土剥ぎを行い、3分の1が終了した。

7月22日（金）晴
上面確認を全員で行う。確認された遺構に石灰で白線を引く。重機による表土剥ぎも引き続き行った。

7月25日（月）晴
表土剥ぎを行う。終日、上面確認。トレンチ内の住居址のプラン確認。

7月26日（火）～8月1日（月）晴
上面確認を行う。

8月2日（火）晴
火葬墓の断面測量を行う上面確認も進む。

8月3日（水）晴
終日、上面確認。確認されたプランに白線を引く。

8月4日（木）晴
火葬墓についての学習会を行う。写真と平面図をとる準備。上面確認も進む。

8月5日（金）晴のち雨
引き続き上面確認。伊那警察署の鑑識職員が火

葬墓出土の骨片の検視に訪れた。

８月８日（月）晴

上面確認を行う。火葬墓の平面測量と側面測量の続きを行った。

８月９日（火）晴

調査区南側の土層断面をとるため約５ｍ幅で壁削りを行う。引き続き上面確認。

８月10日（水）晴

調査区東側・西側の断面測量を行う。明日よりお盆休みのため、作業は本日で一時中断する。

８月22日（月）晴

調査を再開。住居址の掘り下げを行う。１～４号住までの堀りを班毎に分かれて行う。

８月23日（火）晴

１・２号住居址の掘り下げ、土坑・ロームマウンドの半掘り等を行った。

８月24日（水）晴

各土坑と２号住のベルトのセクションをとる。土坑の半掘りを行う。

８月25日（木）晴

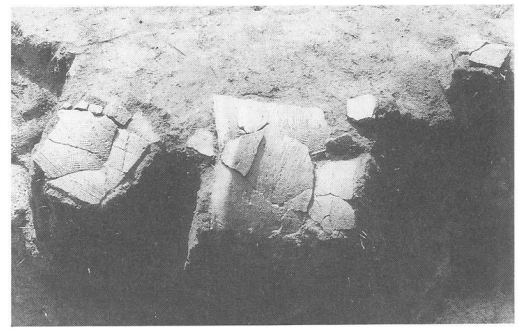
土坑の半カット、１・２号住のベルトはずし等を行う。

８月26日（金）晴

柱穴列の半掘・測量を行う。ロームマウンドの全掘を行った。

８月29日（月）晴

１号住のカマドのセクション、２号住の床の精査、ロームマウンド・土坑の掘り、柱穴列の写真と測量を行った。住居址と思われる箇所にはサブトレンチを設定し掘ることになった。



８月30日（火）晴

柱穴列の土層注記と全掘、土坑の半掘、ロームマウンドの全掘、１号住のカマドの測量、学習会を行う。全員での掘りは本日で終了。

８月31日（水）晴

ロームマウンドの掘りを行う。

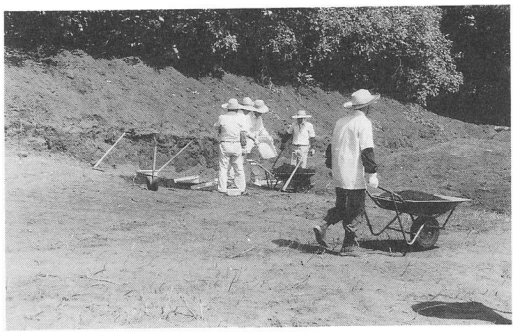
９月１日（木）晴

グリッド打ちを行う。１号住は精査と写真撮影。

ロームマウンドの全掘。

9月2日（金）晴

測量を中心に行う。遺構の写真、遺物の取り上げ、グリッド位置と全体模式図の作成。



9月5日（月）晴

測量を中心に行う。遺構の平面測量や全体写真の撮影、グリッドの名称入れの作業も行った。

9月6日（火）晴

1・2号住の遺り方測量、土坑・ピットの写真撮影を行う。

9月7日（水）晴

1・2号住カマドの実測を行う。土坑・ピットの平面測量は終了。

9月8日（木）曇り

1・2号住カマドの測量、柱穴列等の写真撮影を行う。サブトレンチの土層断面測量。

9月9日（金）晴

2班に分かれ全体測量を行う。住居址の床剥ぎ、遺構の測量と写真撮影を行う。

9月12日（月）晴

カマドの掘り方図、注記、写真撮影、床下の断面測量を行う。

9月14日（水）晴

全景写真撮影、1号住床下とカマドの掘り方平面図作成、2号住床下土器の取り上げを行う。

9月20日（火）晴

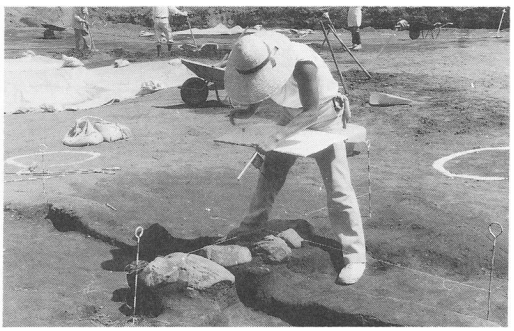
全体写真撮影、1号住掘り方図のレベル入れ、2号住床下の掘りを行う。

9月21日（水）晴

引き続き2号住床下掘り、カマドの測量を行う。

9月22日（木）曇りのち雨

2号住掘り方写真撮影を行う。午後は雨天のため中止。



10月7日（金）晴

機材・事務所の撤収。測量の補修を行い、全作業を終了する。明日より室内整理作業。

第II章　遺跡の環境

第1節　自然環境

箕輪町は、西は木曽山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曽山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、帯無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂の層で構成されている。天竜川はその末端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇央部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源に恵まれている。また、段丘崖下には、天竜川による広大な氾濫原を見ることができる。

松島大原遺跡は、深沢川の沿岸に形成された中小規模の段丘上に立地する遺跡群に属している。このように、恵まれた自然環境の中で一時期の繁栄を誇ったのであろう。

上空より遺跡を望む　　1:8,000

第2節　歴　史　環　境

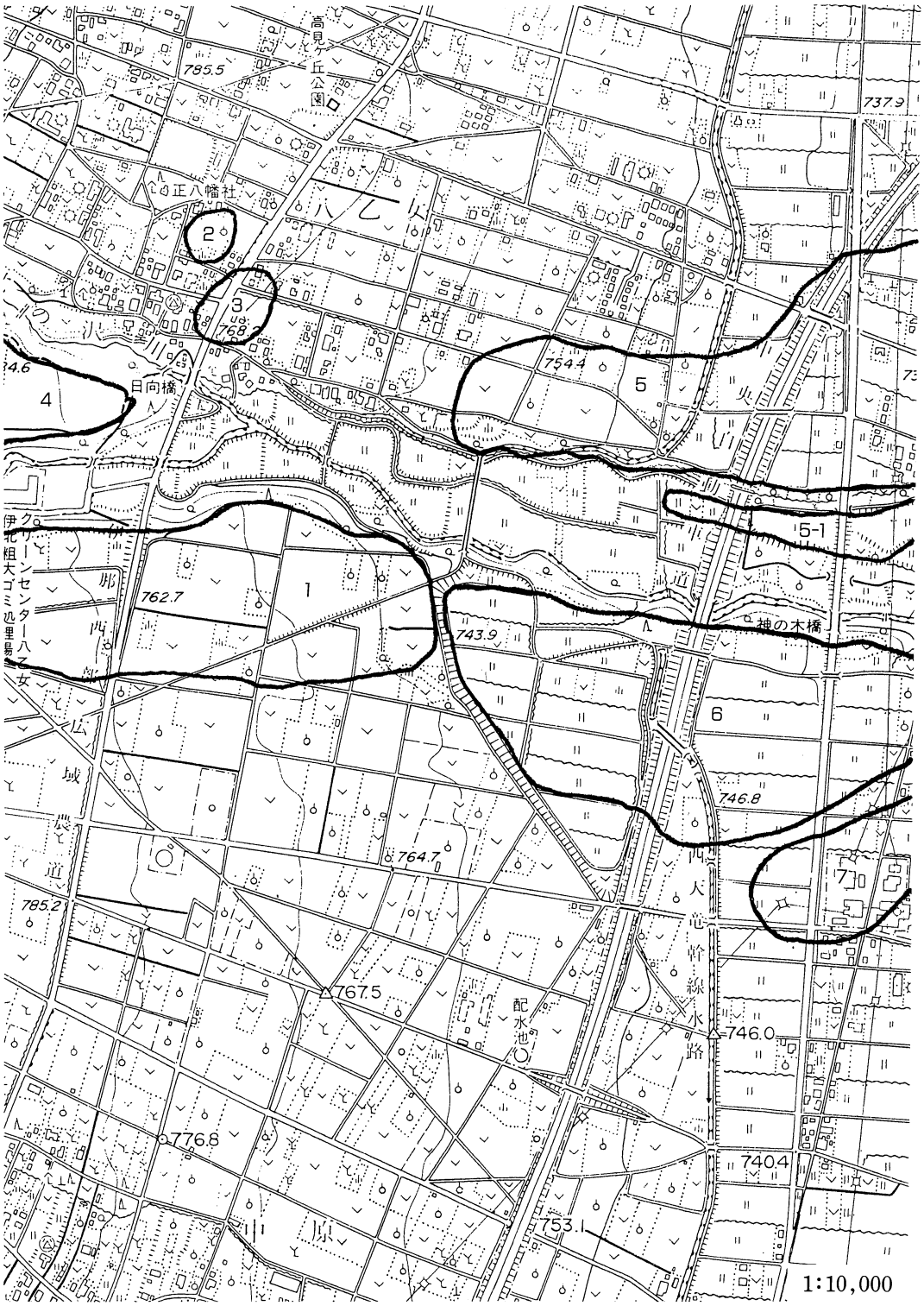
箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地が形成された地形で、湧水にも恵まれ先史より人が居住し易い好的な所といえる。町内にはそんな原始・古代人たちが残した足跡ともいうべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地176箇所、古墳24基が確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。

その多くは河岸段丘状及び扇状地に立地しており、天竜川右岸の遺跡の分布状況は、河岸段丘の突端部にみられる遺跡と、深沢川や桑沢川などの天竜川に注ぐ小河川の両岸に所在する遺跡（1～7）、東西の山裾に広がる遺跡、の3類に大別することができる。本年までに行なわれた発掘例を中心に前者について概観してみると、縄文・弥生・奈良・平安の各時代の集落址、及び墓域を中心とした生活の痕跡、更に段丘崖下の箕輪遺跡に代表される生産遺跡も確認されている。

今後、これらの遺跡を保護していく上でも、この一帯における開発には、充分な注意を図っていく必要があるといえる。

第1表　周辺遺跡分布一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代						備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	
1	松島大原	松島	扇央		○			○	○	
2	祝神	八乙女	扇央		○					
3	五輪	八乙女	扇央		○	○		○	○	昭和48年度発掘調査実施
4	竜ヶ崎	下古田	台地		○					
5	中道	大出	扇央		○		○	○	○	昭和48年度県教委、63、平成5・6年度発掘調査実施
6	堂地	松島	扇央		○	○		○		昭和48年度県教委、62・平成5年度発掘調査実施
7	大道上	松島	扇央		○			○		平成6年度試掘調査実施


高見ヶ丘公園
785.5
737.9
正八幡社
八乙女
2
3
768.2
754.4
5
日向橋
4
5-1
762.7
1
743.9
地の木橋
6
746.8
764.7
7
785.2
767.5
配水池
746.0
776.8
740.4
753.1
1:10,000

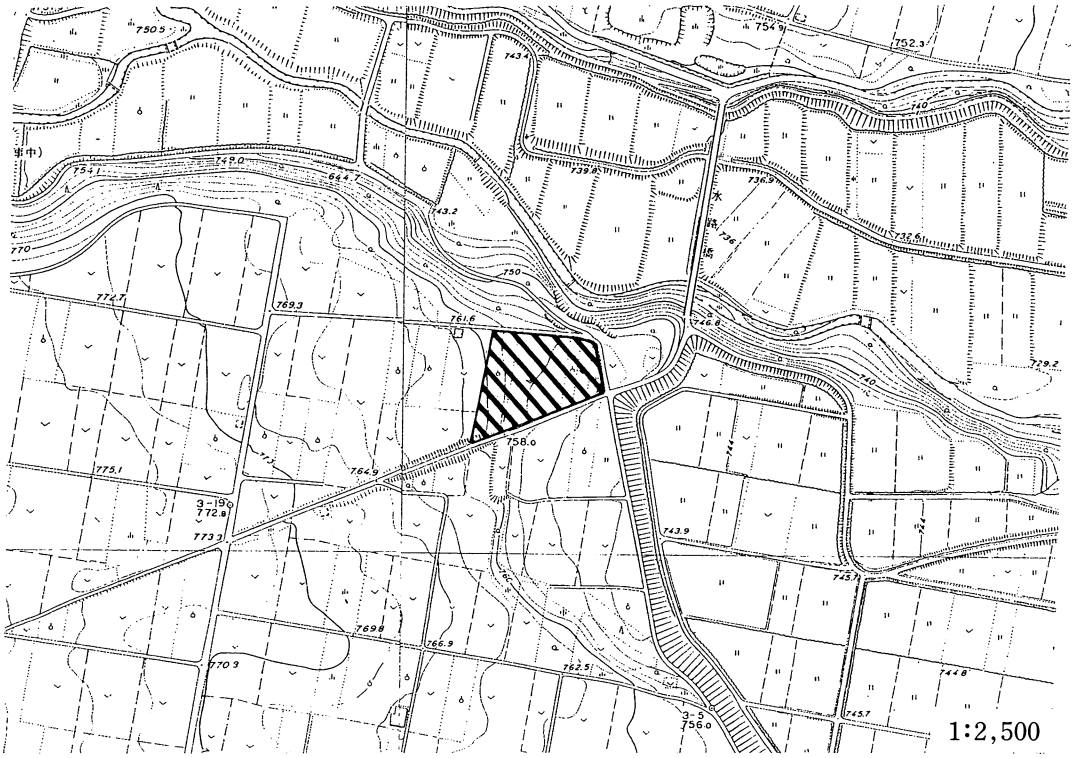
第2図　周辺遺跡分布図

第Ⅲ章　調 査 の 結 果

第１節　調査方法と結果概要

調査区は、その東側が昭和48年度に中央自動車道路建設に先立つ堂地遺跡の発掘調査が実施された箇所にあたり、工事対象面積4.000㎡全面積が今回の調査対象であった。一帯は、西天竜による土地改良が及ばず、僅かながら南北にうねりを残す、緩やかな自然傾斜地である。現在、胡桃・梅の林、雑穀・野菜の畑作地等が一帯の土地利用であるが、かつては松や雑木が生い茂る、地元ではこの一帯を「山」と呼ぶ森林地帯であった（第３図）。

調査は、まず調査地範囲の遺構の有無を確認すると同時に、本調査対象範囲を定めるための、試掘調査から取りかかった。調査区を南北方向におよそ10m間隔で、トレンチの基準を４ヶ所程設定し、大型バックホーで部分的に土層の変化を確認しながら掘削を行った。その結果、調査区の南東部に向かって、緩やかな自然傾斜がみられると同時に堆積土も厚く、暗褐色土（Ⅳ層）確認面で遺構の検出が得られたのに対し、北西部においてはテフラ層（Ⅵ層）ないしテフラの漸移層（Ⅴ層）まで削平され、その確認面で遺構が検出した。そして、地形の傾斜を考慮し、遺構確認面の直上までの表土を大型バックホーで剥ぎ取り、その後は手作業による遺構上



第３図　調査区設定図

面確認作業、遺構内覆土の掘削及び断面測量、写真撮影・平面測量等の記録作業の手順で行った。遺構は、種別ごとに検出順で番号を付けた。グリッドは、5m四方で主軸を南北方向に合わせ設定し、南北方向をアルファベットで、東西方向をローマ数字を用いて呼称した。記録作業における標高の割り出しは、調査区の南東部の道路面に工事用ベンチマークを基準にして、調査区南側にベンチマークを設定した（762.233m）。

第2節　土層堆積状況

天竜川西岸の扇状地上における地質構造は、耕作土等黒褐色腐食土層→火山灰土層（テフラ層）→砂岩・粘板岩を主とする砂礫層という堆積状況が普遍的にみられる。遺構の検出は、主に耕作土下の自然堆積黒褐色土、もしくはテフラの漸移層が一般的で、土地改良等による地形の削平により、テフラ確認面が遺構検出面である場合も少なくない。また多くの遺構は、テフラ層内にまで掘り込むものが多く、中には砂礫層にまで及ぶものも見られる。

Ⅰ層－にぶい黄褐色土（10YR4/3）　明黄褐色土（10YR6/6）をまばらに含む、耕作土等の表土。

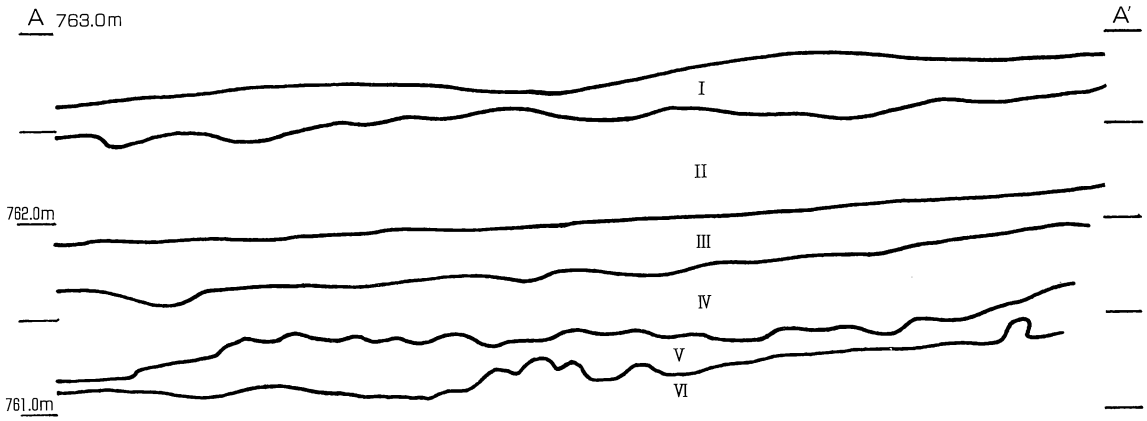
Ⅱ層－明黄褐色土（10YR7/6）　土地改良工事によるものと思われる、人為的な搬入土。本調査区においては、南東部にのみ確認された。

Ⅲ層－黒褐色土（10YR3/2）　0.5～5cmの礫をまばらに含む。

Ⅳ層－暗褐色土（10YR3/3）　0.5～5cmの礫をまばらに含む。本層確認面が奈良・平安時代の遺構確認面である。

Ⅴ層－褐色土（10YR4/4）　黄褐色土（10YR5/6）を多量に含む。第Ⅵ層の漸移層で、縄文時代の遺構確認層である。

Ⅵ層－明黄褐色土（10YR6/8）　一般的に本地域では、ローム層または赤土と呼ばれる火山灰土層（テフラ）。



第4図　土　層　図

0　(1:40)　2m

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　住　居　址

１号住居址

遺構（第５・６図）調査区の南東、Ｂ－８・Ｃ－８グリッドに位置する。N-83°-Wに主軸を指し、南北幅が3.9m、東西幅が3.9mを測る隅丸方形を呈するプラン形状である。覆土は４分層され、炭化物の混入も少ない黒色または黒褐色の比較的単一的な土質であった。

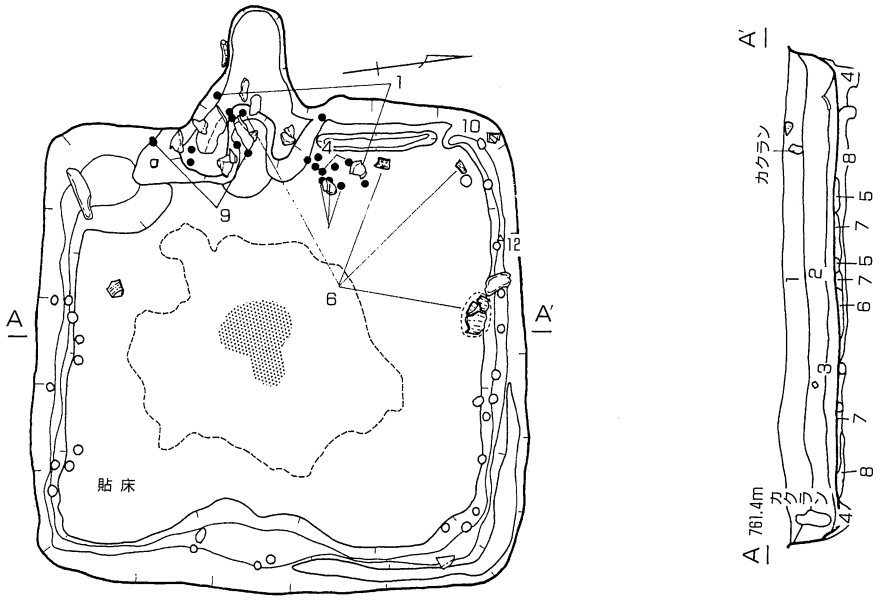
床は全体的に堅固に叩き締められ、中でも中央部とカマドの周辺が著しい。貼床及び貼床下の埋土も４分層でき、貼り床は主に床面の外周に施され、中央部は地山のテフラを叩き締めた状態を観察している。

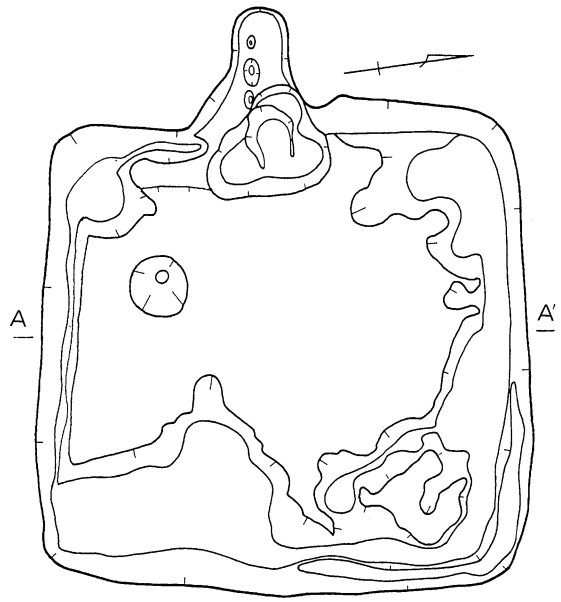
壁残高は35～50cmを測り、緩やかな傾斜のせいか西壁に対し東壁が浅く、10～15cm程の比高差が認められた。

周溝は、床面より５cm前後の深さでほぼ壁下全域に巡らされる。また、南東コーナーには、１m前後の径で床面から15～20cm深さを測る円形の土坑状の落ち込みが確認され、外周する周溝と直結する。尚、周溝内（一部床面）には不規則な間隔ではあるが、直形５cm前後の小穴が認められたが、柱穴を匂わせるピットの痕跡は掘型からも認められなっかった。

カマドは、西壁の中央やや左側に位置し、袖部は黄褐色及び暗褐色のテフラを主に自然石とで構成された石芯粘土カマドである。袖部の前方部に残存する芯石は、土圧により火焼部に倒れ混み、天井部を形成していたと思われる袖部とほぼ同じテフラの粘土は、左側コーナーの土坑内に流入していた。また火焼部の床面は著しく火熱を受けた状況を示し、その奥中央には脚石が残存していた。煙道は、火焼部と段部を持って区切られ、西へ95cm程張り出している。

遺物（第７・８図）鉄器は、9.0×4.8cmの長方形を呈する板状鉄器（１）で、中央に0.8cm、基部に２ヶ所0.5cmの穿孔がなされ、基部は欠損する。用途は不明である。須恵器は坏（２・３）、蓋（４）、甕（９）が、土師器は甕（７・８・11）、小型甕（５・６・12）が出土した。まとまった遺物は、壁部にまばらに見られた以外は主にカマド内とその周辺部に集中して出土している。２の坏は、やや内湾気味に立ち上がる体部で、底部に墨書で「帯宮」？の文字が認められる。甕は、ナデ後ハケ調整による長胴甕（７・８）とロクロ整形甕（10）と、非ロクロ整形の小型甕よる構成が見られる。

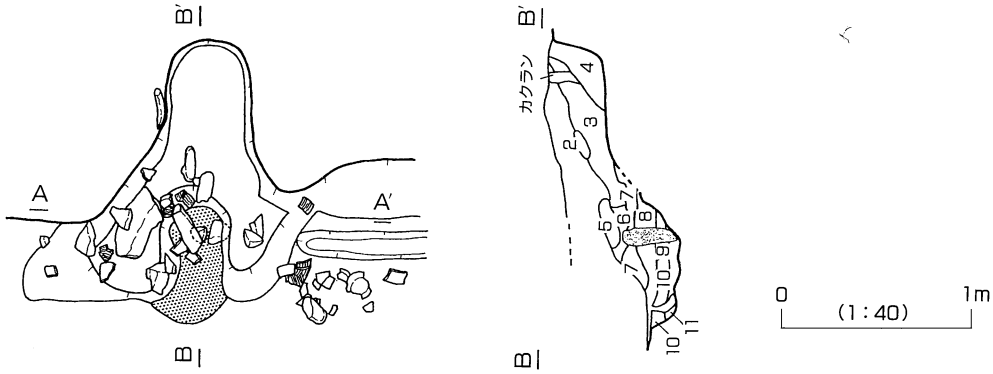


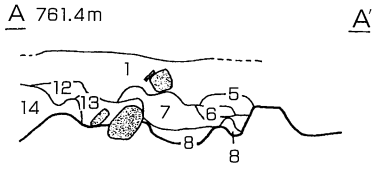


0　(1：60)　2m

1層：10YR2/2（黒褐色）　径0.1cmのローム粒子を20%含む
2層：10YR2/2（黒褐色）　径0.1～0.5cmのローム粒子を5%含む
3層：10YR2/1（黒色）　10YR6/8（明黄褐色）のロームブロックを２%含む
4層：10YR2/1（黒色）　10YR6/8（明黄褐色）のローム粒子を10%含む
5層：10YR2/1（黒色）　10YR6/8（明黄褐色）のローム粒子を５%、焼土を３%含む
6層：2.5YR4/8（赤褐色）　火焼を強く受けている
7層：10YR5/8（黄褐色）
8層：10YR5/6（黄褐色）　７層より締まりが弱い

第5図　1号住居址実測図

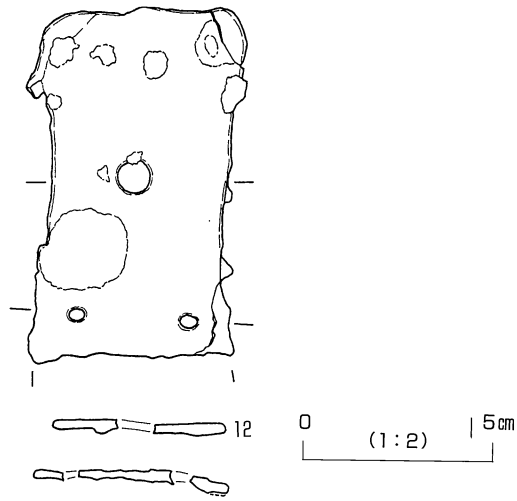




第6図　1号住居址カマド実測図

1層：10YR2/2（黒褐色）　径0.1cmのローム粒子を20%含む
2層：5YR3/4（暗赤褐色）　5YR4/8（赤褐色）を50%含む。
3層：10YR2/3（黒褐色）　10YR5/4(にぶい黄褐色）のハードブロックを30%、焼土を２%含む
4層：7.5YR3/3（暗褐色）　10YR4/6を２%含む
5層：2.5Y4/4（オリーブ褐色）
6層：10YR3/3（暗褐色）　2.5Y4/4を２%含む
7層：2.5Y4/4（オリーブ褐色）　5YR4/6（赤褐色）と10YR2/2（黒褐色）を５%含む
8層：10YR3/3（暗褐色）　5YR4/8（赤褐色）を２%含む
9層：5YR3/6（暗赤褐色）　10YR5/8（黄褐色）のローム粒子を３%含む
10層：2.5YR4/8（赤褐色）　焼土を50%以上、炭化物を２%含む
11層：5YR3/3（暗赤褐色）　7.5YR5/8（明褐色）のローム粒子を10%、炭化物を５%含む
12層：10YR3/4（暗褐色）
13層：2.5Y4/3（オリーブ褐色）　10YR5/8を１%含む
14層：10YR5/8（黄褐色）

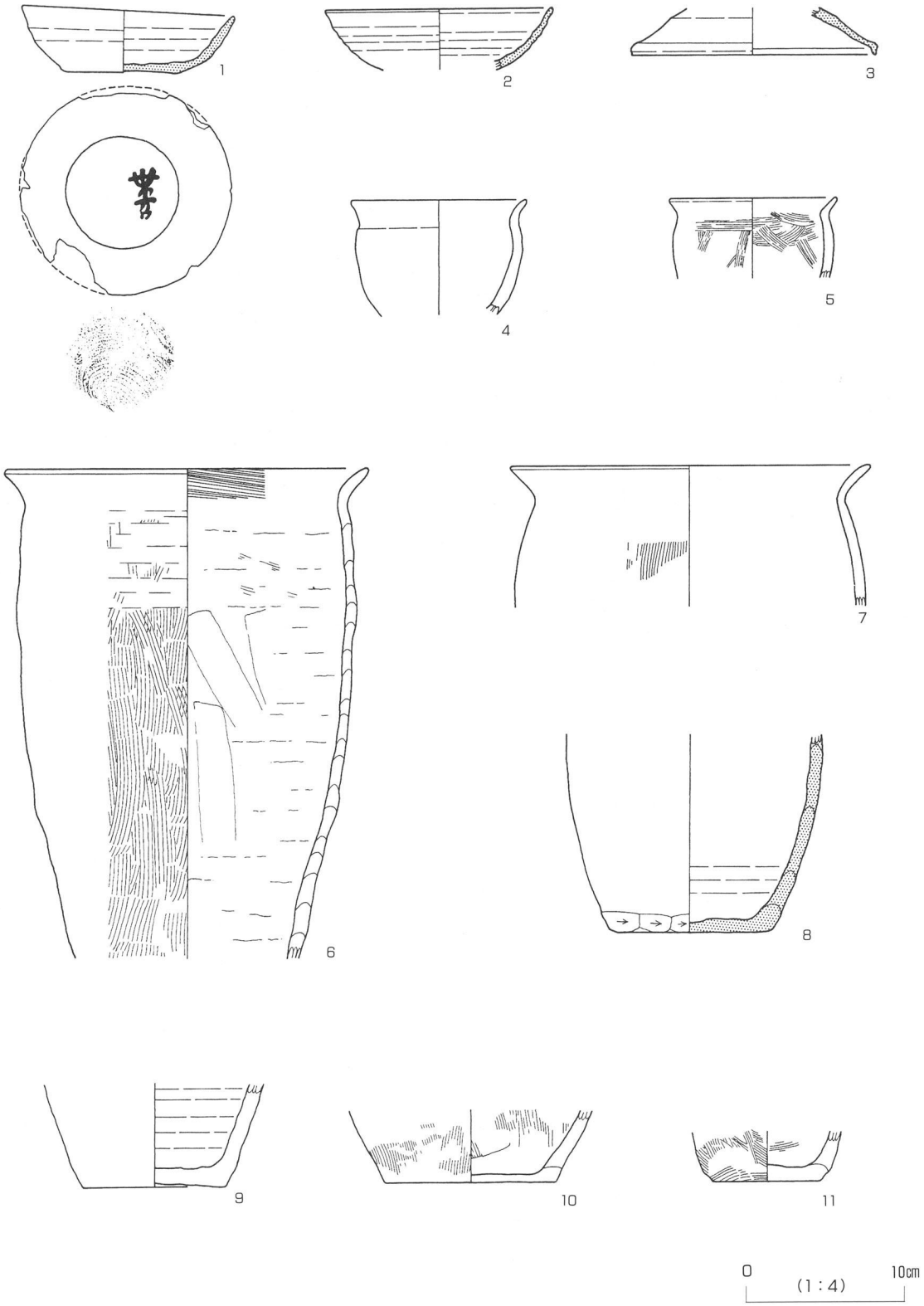
これらの特徴から、本址は奈良時代から平安時代初段階に時期判定を考える。



第8図　1号住居址出土鉄器実測図

第2表　1号住居址出土鉄器観察表

番号	器　種　名	法量(cm)	重さ(g)	特　　徴
12	板状鉄器	(9.0) 4.8 0.2	31.9	ほぼ中央部に直径0.8cmの穿孔が、また下部に約0.5cmの穿孔が２ヶ所認められる。用途不明。



第7図　1号住居址出土土器実測図

第3表　1号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	坏	12.8 7.0 4.2	体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は直線的に開く。底部平底。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り 内面－ロクロナデ	胎土中小石・砂粒を含む 底部墨書「帯宮」？ ５Ｙ７/１（灰白色）
2	坏	(14.4) ——— (3.9)	体部は内湾ぎみに開く。	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	胎土に砂粒含む。 ５Ｙ６/３（オリーブ黄色）
3	蓋	——— (15.4) (3.0)		外面－ロクロナデ、天井部へラケズリ 内面－ロクロナデ	つまみ部欠損。内面自然釉付着。
4	小型甕	(11.2) ——— (7.3)	口縁部「く」の字状に短く外反し、胴部は軽く膨らむ。口縁部と頸部の境に稜を有する。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面－口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胎土に雲母、砂粒を含む。 10ＹＲ６/４（にぶい黄橙色）
5	小型甕	(10.6) ——— (5.0)	口縁部は「く」の字状に短く外反する。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面－ナデ	炭化物付着。胎土に雲母、砂粒含む。10ＹＲ５/３（にぶい黄褐色）
6	長胴甕	(23.0) ——— (31.4)	口縁部は短く外反する。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部縦方向のハケ目後、胴上半部のみヨコナデ 内面－口縁部ヨコナデ後ハケ、胴部ナデ	外面炭化物付着。胎土に雲母、砂粒含む。 7.5ＹＲ６/４（橙色）
7	甕	(22.8) ——— (9.0)	口縁部「く」の字状に外反する。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部は部分的にハケ目が残る 内面－口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胎土に雲母、砂粒を多く含む。 7.5ＹＲ７/４（橙色）
8	甕	——— 9.2 (12.6)	体部がやや内湾ぎみに立ち上がり、底部平底。	外面－ロクロナデ、底辺部へラケズリ 内面－ロクロナデ	外面、自然釉付着。胎土に砂粒を含む。 2.5Ｙ６/２（灰黄色）
9	甕	——— 9.1 (6.6)	体部は直線的に立ち上がり、底部平底。	外面－ロクロナデ、底部静止糸切り 内面－ロクロナデ	外面炭化物付着。胎土に雲母、砂粒を含む。 7.5ＹＲ６/６（橙色）
10	甕	——— (10.8) (4.7)	胴部に比べて、底部の器厚が薄い。 底部平底。	外面－ハケ 内面－ハケ	胎土に雲母、砂粒を含む。 10ＹＲ６/４（にぶい黄橙色）
11	甕	——— (6.8) (3.2)	底部平底。	外面－ハケ、底部木葉痕 内面－ハケ	胎土に砂粒を含む。 10ＹＲ７/３（にぶい黄橙色）

2号住居址

遺構（第9図）調査区のほぼ中央、F－6・7グリッドに位置する。主軸をN-82°-Wを指し、1号住居址とおよそ同じ方向を示す。南北幅が4.3m、東西幅が4.2mを測る隅丸方形を呈するプラン形状であるが、カマドが構築される西壁のみカマドに向けて壁が広がり、むしろ五角形を思わせる形状である。また、覆土は9分層されたが、第7・8層と9・10層の2層に床が確認でき、改築もしくは増築を行った形跡が認められた。特に第7・8層床面時のプラン形状は、北西コーナーがやや角ばり、壁下の周溝も貼り床もなく、掘り込んだテフラ露出面を叩き固めた拡張部を造作している。それに対し第9・10層床面は、本来のプランと考えられ、北西コーナーの周溝も構築され、形状も南西壁とほぼ対象となる。炭化物の混入は下層ほどその割合が多くなり、褐色または黒・暗褐色の比較的単一的な土質であり、第3～6層にかけて拳大から人頭大の礫が混入する。

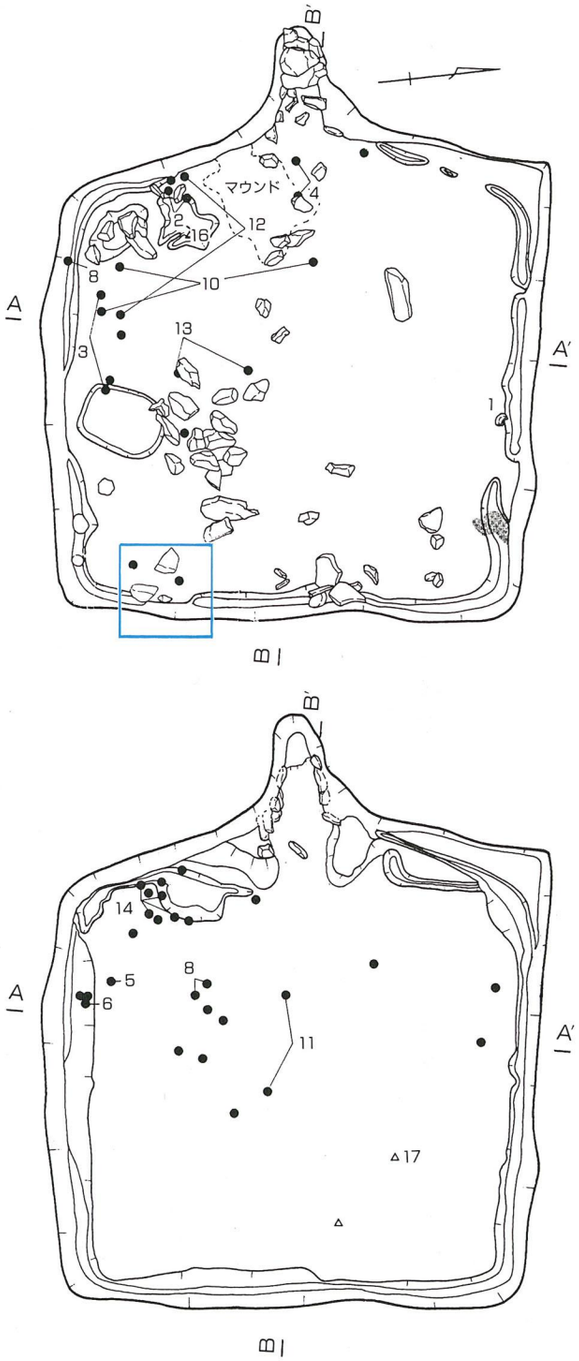
第7・8層の床は、全体的に叩き締められてはいるが、部分的に軟弱な箇所、特に外側ほどそれが顕著に現れている貼り床である。第9・10層床は、第7・8層床よりも堅固に叩き締められ、中でも中央部とカマドの周辺が著しい。貼り床及び貼り床下の埋土も4分層でき、テフラ露出面の叩きは認められなかった。

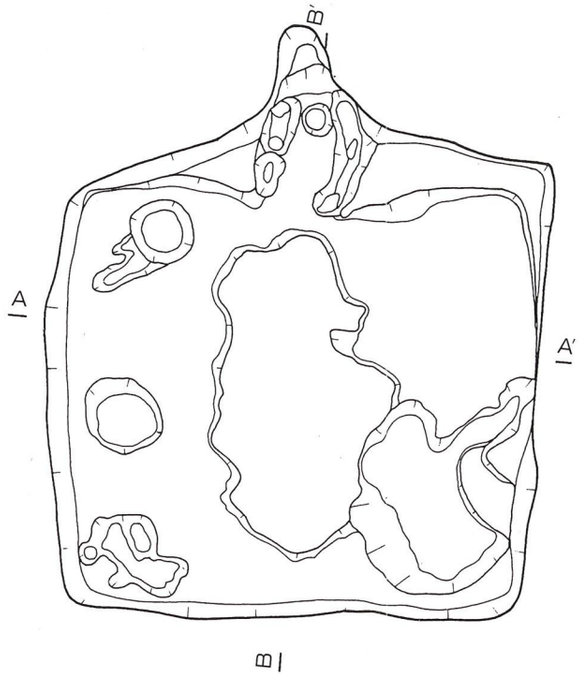
第7・8層の床の壁残高は57～62cmを測り、緩やかな傾斜のせいか西壁に対し東壁が浅く、5cm前後の比高差が認められた。周溝は、床面より5cm前後の深さでほぼ壁下全域に巡らされるが、拡張箇所は上記のとおり認められない。また第9・10層床の壁残高は62～75cmを測り、周溝はのほぼ全域に巡らされる。尚、柱穴と思われるピットの痕跡は掘型からも認められなっかった。

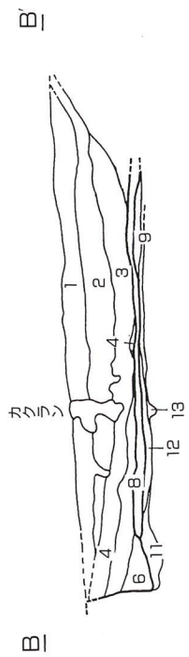
カマドは西壁のほぼ中央に位置し、褐色系の粘土を主体に自然石とで構成された石芯粘土カマドである。袖部の芯石は土圧による倒れ混みも少なく、覆土断面に観察できた天井部と思われる火焼した粘土層も確認できた。また、煙道は外部へ突出し、天井部の板状の石材も残存し、火焼部に対し段部を形成して登り窯状になっていた。尚、火焼部に接する芯石と床面は、著しく火熱を受けた状況を示していた。

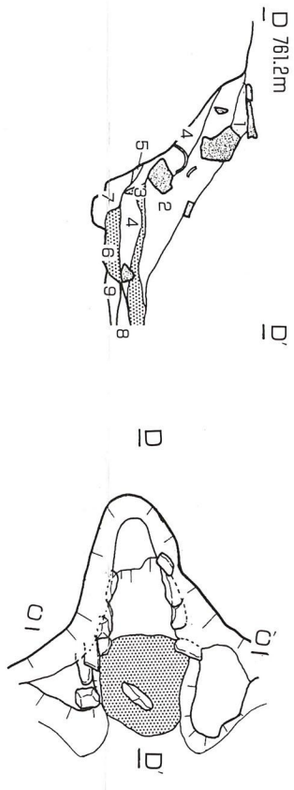
遺物（第10～12図）須恵器は高台付坏（1）、坏（2～6）が、土師器は甕（7～9・12～15）、小型甕（10・11）が出土している。甕は、ナデ後ハケ調整による長胴甕（7～9）とロクロ整形甕（10～13）とによる構成が見られる。器形を判別できる土器のほとんどが、第7・8層床面のカマド南前方部に集中しており、第9・10層床面出土土器との接合はないものの、著しい形式的変化は感じられない。鉄器は、くさび状鉄器2点（16・17）と、鉄滓2点である。また、東壁に編み物石と思われる集石が認められた。

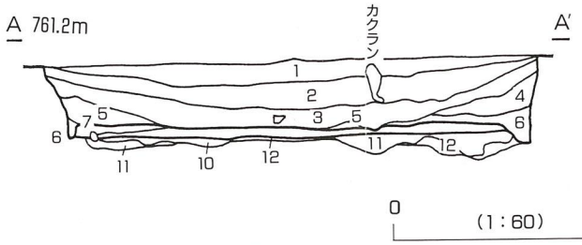
これらの特徴から、本址は奈良時代から平安時代初段階に時期判定を考える。



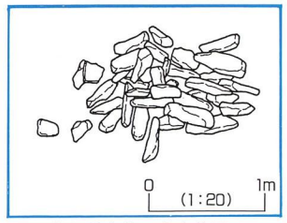






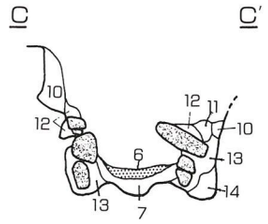


1層：10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を２％含む
2層：10YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を５％含む
3層：10YR4/4（褐色）　ローム粒子を10％含む
4層：10YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を５％含む
5層：10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を３％、炭化物を１％含む
6層：10YR4/4（褐色）　ローム粒子を10％、部分的に焼土ブロックを含む
7層：10YR3/2（黒褐色）　ローム粒子を３％、焼土を１％含む
8層：10YR2/3（黒褐色）　ロームブロックを15％、焼土ブロックを１％含む
拡張後床面（貼床）
9層：10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を10％、焼土ブロックを１％含む
10層：10YR2/1（黒色）　ローム粒子を10％含む　拡張前床面（貼床）
11層：10YR4/6（褐色）　黒色土（10YR2/1）を５％、土器片まばらに含む
12層：10YR5/8（黄褐色）



住居址内集石出土状況

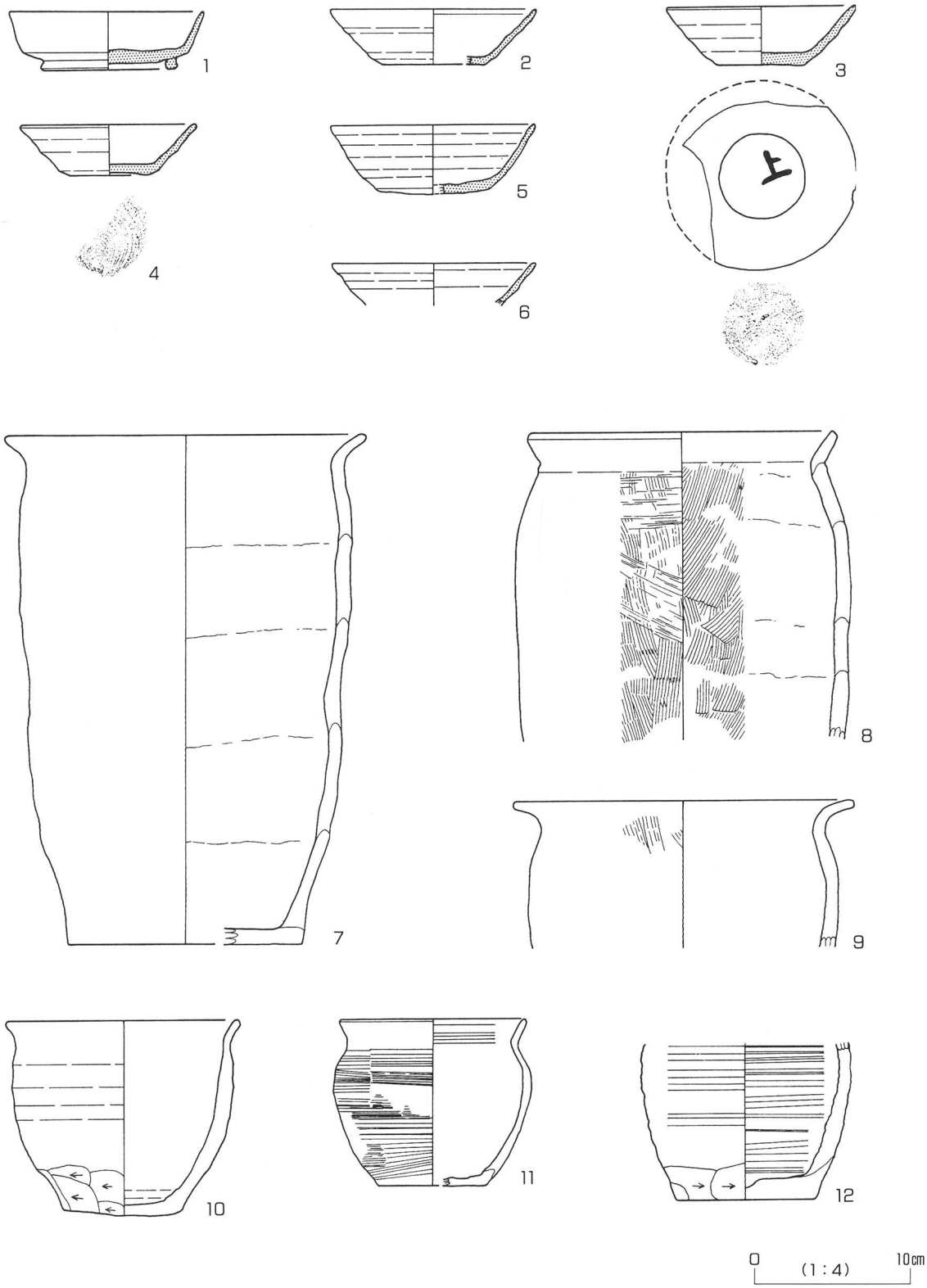
1層：10YR3/3（暗褐色）　住居址覆土１層に該当
2層：7.5YR2/3（極暗褐色）　ローム粒子を５％含む
3層：2.5YR4/6（赤褐色）　焼土（カマド天井部？）締まり強
4層：7.5YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を５％含む
5層：2.5YR5/8（明赤褐色）　焼土が主体
6層：5YR4/8（赤褐色）　焼土（火焼部）締まり強



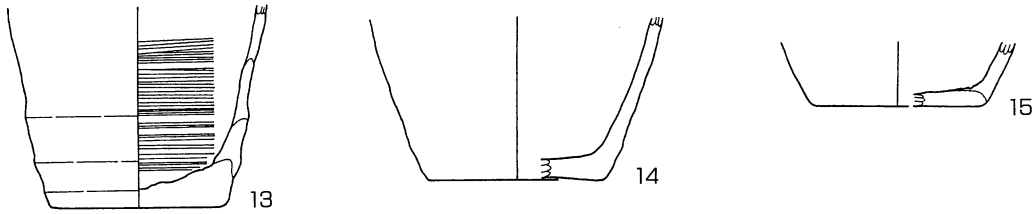
7層：7.5YR2/3（極暗褐色）　ローム粒子を10％含む
8層：10YR2/3（黒褐色）　住居址覆土８層に該当
9層：10YR2/1（黒色）　住居址覆土10層に該当
10層：10YR2/2（黒色）　ローム粒子を２％含む
11層：5YR2/3（極暗赤褐色）　褐色土（7.5YR4/6）を２％含む
12層：7.5YR4/6（褐色）　締まり強（天井部？）
13層：7.5YR3/2（黒褐色）　ローム粒子を10％含む
14層：10YR3/3（暗褐色）

0
(1：40)
1m

第９図　２号住居址・カマド実測図



第10図　2号住居址出土土器実測図 1

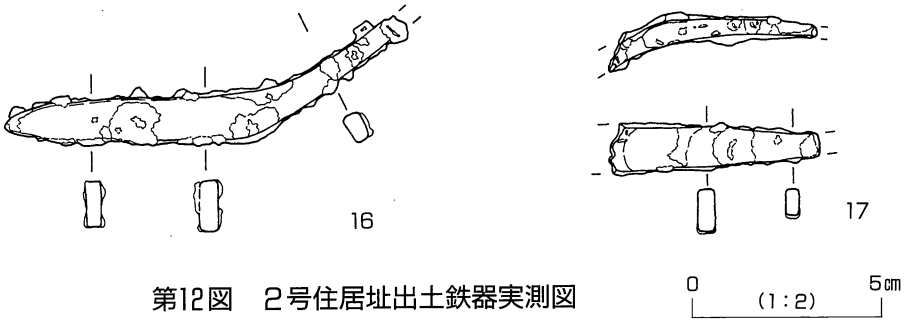


第11図　2号住居址出土土器実測図 2

0　(1:4)　10cm

第4表　2号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	高台付坏	(12.6) 8.4 3.8	体部は直線的に開く。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り後高台貼り付け 内面－ロクロナデ	胎土に小石、乳白色砂粒を多く含む。焼成良好。５Ｙ６/２（灰オリーブ色）
2	坏	(13.2) (6.6) 3.6	体部は直線的に大きく開く。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り？ 内面－ロクロナデ	胎土に小石、砂粒を含む。５Ｙ６/２（灰オリーブ色）
3	坏	(12.2) 5.4 3.8	体部は直線的に開く。 底部平底。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り 内面－ロクロナデ	胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。底部に墨書「上」の文字を有す。7.5Y6/1(灰色)
4	坏	(11.4) 3.2 5.2	体部は直線的に開く。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り 内面－ロクロナデ	胎土に砂粒を含む。Ｎ６/０（灰色）
5	坏	(13.2) (6.8) 4.4	体部はやや内湾ぎみに開く。	外面－ロクロナデ、底部回転糸切り 内面－ロクロナデ	胎土に小石、砂粒を含む。部分的に錆付着。５Ｙ６/１（灰色）
6	坏	(13.2) ―― (2.7)		外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	10ＹＲ６/２（灰黄褐色）
7	長胴甕	(23.0) (15.0) 33.1	口縁部は弓なりに外反し、胴部は長く直線的に下降する。 底部平底。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面－口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	外面炭化物付着。胎土に雲母、砂粒を含む。10ＹＲ６/４（にぶい黄橙色）
8	長胴甕	(19.5) (20.6) ――	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は直線的に下降する。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部縦方向のハケ目後、横、斜位方向のナデ 内面－口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	胎土に雲母、砂粒を含む。10ＹＲ５/４（にぶい黄褐色）
9	甕	(21.6) (19.5) ――	口縁部は弓なりに外反する。	外面－風化のため部分的にハケが残る 内面－ナデ	胎土に雲母、砂粒を含む。10ＹＲ６/４（にぶい黄橙色）
10	壺	14.8 7.2 12.6	口縁部は「こ」の字状に外反し、胴部は軽く膨らむ。	外面－ロクロナデ、底辺部ヘラケズリ 内面－ロクロナデ	胎土に砂粒を含む。7.5ＹＲ６/８（橙色）
11	小型甕	(11.8) (7.0) 10.8	口縁部は弓なりに外反し、胴部は球状を呈する。	外面－ロクロ回転ハケ目、底部？ 内面－口縁部ロクロ回転ハケ、胴部ロクロナデ	10ＹＲ４/３（にぶい黄褐色）
12	甕	―― 9.0 (10.2)	内面底部中心が急に落ち込んでいる。 底部平底。	外面－ロクロ回転ハケ目底辺部ヘラケズリ底部糸切り切り離し後ヘラナデ 内面－ロクロ回転ハケ	胎土に雲母、砂粒を多く含む。10ＹＲ５/３（にぶい黄褐色）
13	甕	―― 9.2 (10.6)	底部器厚が厚く、平底。	外面－ロクロナデ 内面－ロクロ回転ハケ	外面炭化物付着。胎土に雲母、白色砂粒を含む。7.5ＹＲ６/４（にぶい橙色）
14	甕	―― (9.3) (8.5)		外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	外面炭化物付着。胎土に雲母、白色砂粒を含む。7.5ＹＲ６/６（橙色）
15	甕	―― (8.4) (3.4)		外面－ロクロナデ、底部静止？糸切り 内面－ロクロナデ	内面炭化物付着。胎土に雲母砂粒を含む。10ＹＲ６/４（にぶい黄橙色）



第12図　2号住居址出土鉄器実測図

第5表　2号住居址出土鉄器観察表

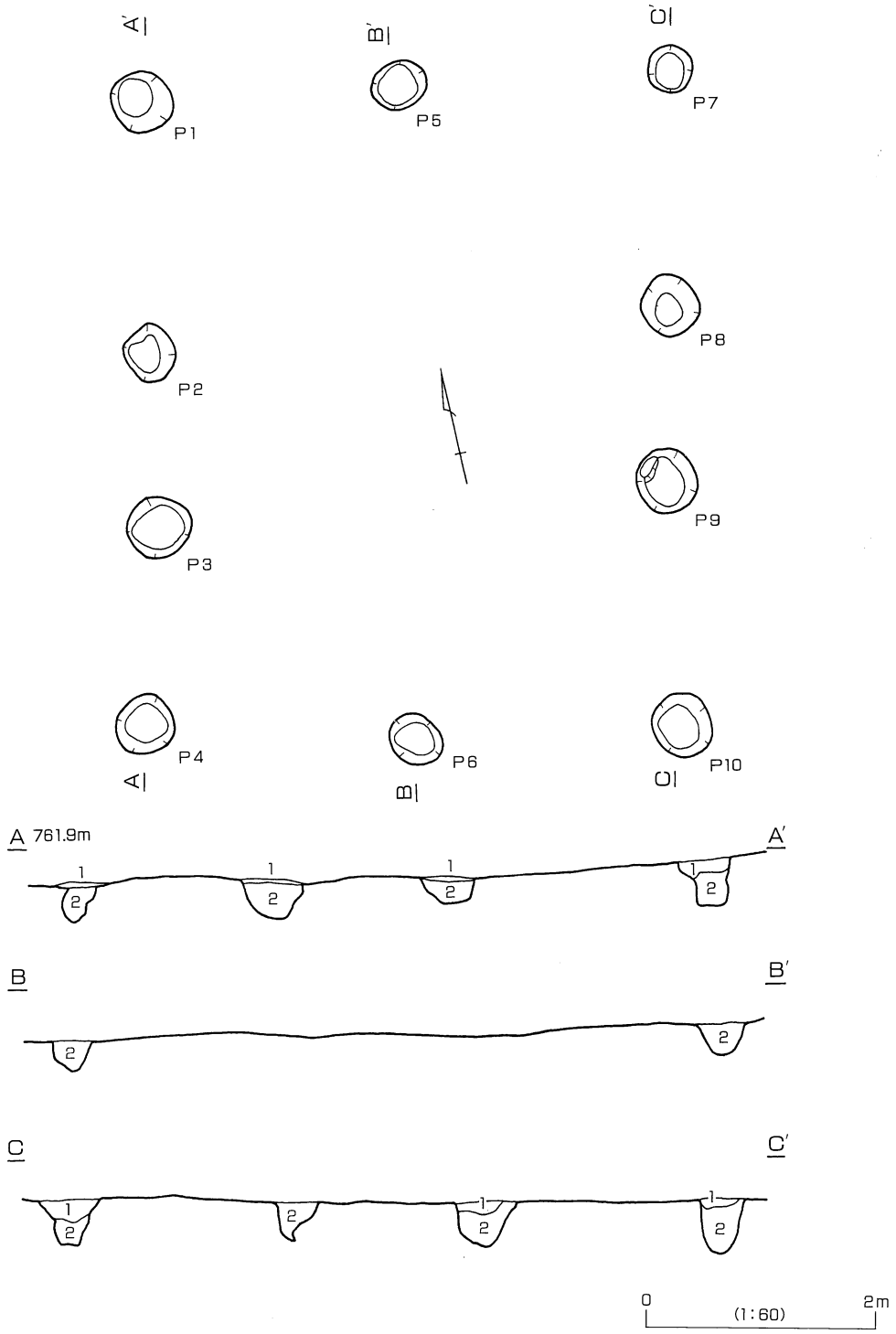
番号	器　種　名	法量(cm)	重さ(g)	特　　徴
16	刀子（？）	(11.0) 1.3 0.8	29.5	刀部は認められない。
17	刀子（？）	(5.8) 0.8 0.6	13.5	刀子の柄の部分か？

第2節　掘立柱建物址

1号掘立柱建物址

遺構（第13図）調査区の南側B－6・7、C－6・7グリッドに位置し、長軸がN-12°-E方向を指す。本址は、長軸方向4本、短軸方向3本の柱から構成される6.0×5.2m（3×2間）の建物址の柱穴跡で、柱間は南北列でおよそ1.6m-1.0m-1.6m、東西列でおよそ1.8-1.9mを測る。ピットの平面形はほぼ円形を呈し、その規模はP_1（57×57×36cm）、P_2（51×46×33cm）、P_3（60×55×24cm）、P_4（57×53×45cm）、P_5（51×45×24cm）、P_6（51×42×26cm）、P_7（45×42×42cm）、P_8（57×51×36cm）、P_9（54×52×39cm）、P_{10}（58×52×49cm）である。底面は全体的に軟弱で、底面をはっきりと確認できないピットも多い。また、各ピット内の覆土は2分層されたが、平面及び断面で柱根らしき痕跡は確認できなっかった。しかし、本址の基礎となる四隅のピット（P_1 P_4 P_7 P_{10}）は、他と比較して気持ち深めである事を観察した。

尚、出土遺物は須恵器・土師器の破片のみで、各住居址と同時期もしくはそれに近接するものと考えられる。



1 層：10YR2/3（黒褐色）
2 層：7.5YR2/2（黒褐色）　　10YR5/6(黄褐色）を１％含む

第13図　1号掘立柱建物址実測図

第３節　土　　坑

遺構（第14・15図）調査区から12基の土坑を検出した。主に、プラン形状が掘立柱建物址のピットと類似性が薄く、かつ比較的大型で複数に覆土が分層できたものを土坑とし、ピットと大別した。土坑は、規模・形状・内部構造等の諸特徴により、大きく３つのタイプに細分した。これにより、各土坑の用途・性格が異なると思われる。

A類（３・７・17号土坑）

下記の諸特徴から、属に「落し穴」と呼ばれる土坑の一群である。

平面プランの形状は比較的整った円形もしくは楕円形を呈し、直径または長軸が1.5m、深さも0.8mを越える大型土坑である。底面はほぼ平らに整えられ、法面上部で段部を形成しすり鉢状に掘り込まれるもの（７号）、段部をもって垂直気味に掘り込まれるもの（17号）、段部はなく垂直に掘り込まれるもの（３号）等、それぞれに微妙な違いがみられる。しかし、底面中央部にはプランの長軸方向に添って、木杭の基部を埋め込んだと推測する直径15cm前後の小穴を２～３穴有する共通点を持つ。覆土は、レンズ状に規則性のある自然堆積であった。

また７号土坑のように、法面に直径５cm前後の小穴が不規則ながら適度な間隔に配置する。掘り込み角度のほとんどが、法面に対し斜方向に開けられる。それぞれに杭が装着されたと仮定するならば、土坑の中心部、それも上面に先端部が向けられたと考えられる。

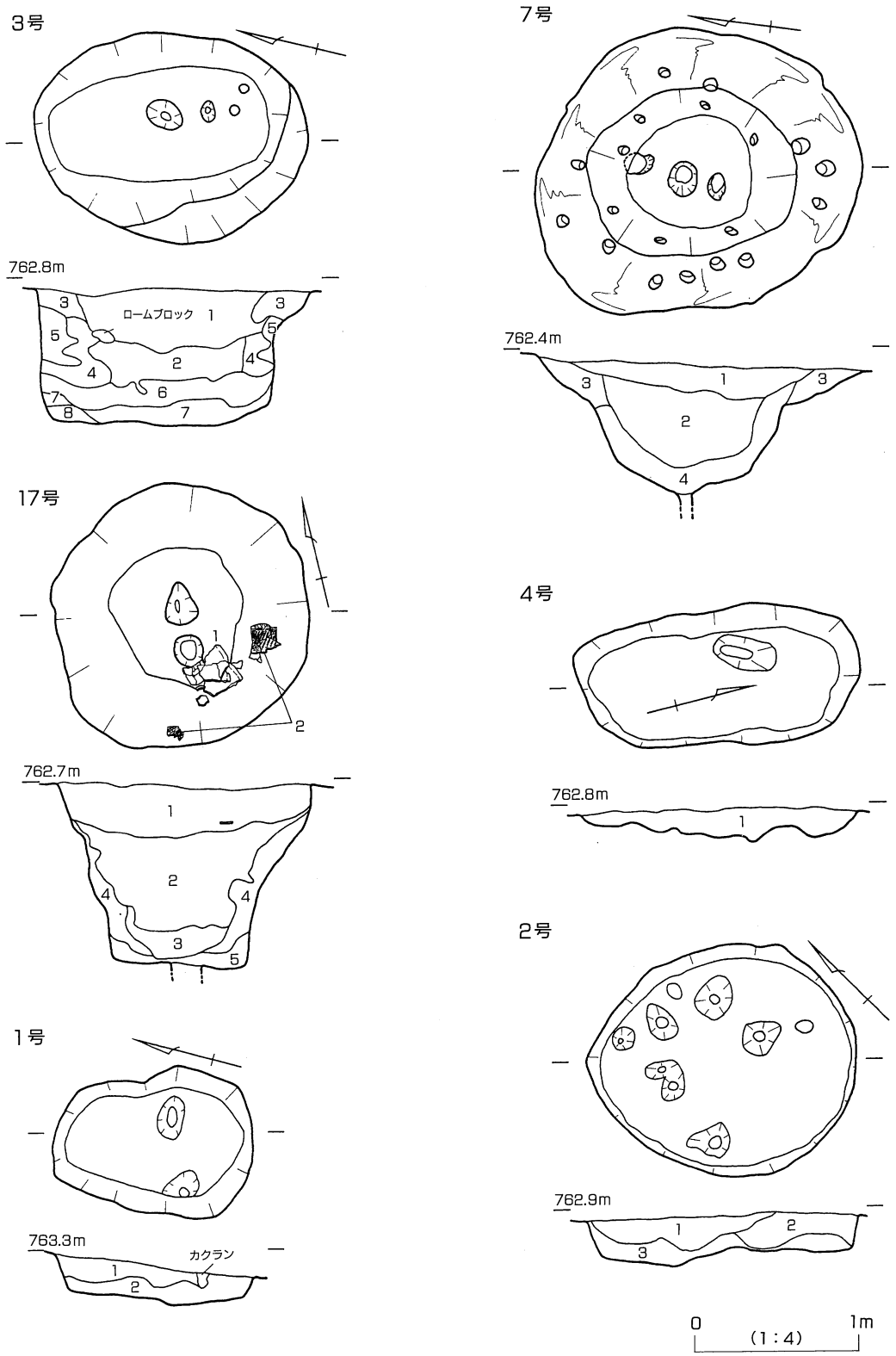
B類（10号土坑）

平面プランが整った円形を呈するもので、円筒状にほぼ垂直に深く掘り込まれ、底面は平坦で壁面も丁寧に整えられる。また覆土の堆積もA類と比較するならば、やや締まりに欠け不自然に順層する。

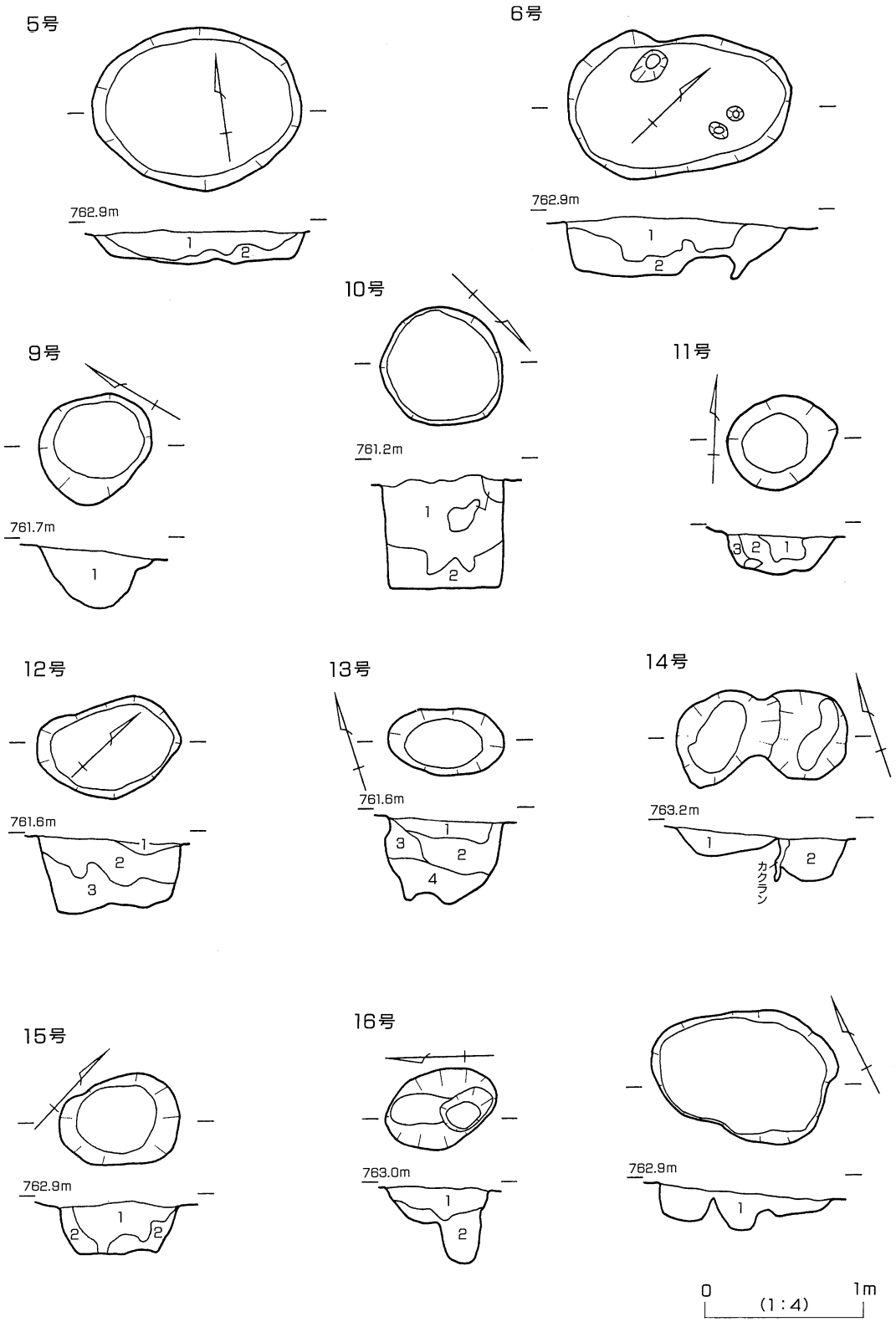
C類（１・２・４～６・８・９・11～18号土坑）

検出した土坑の大多数を占める一群で、平面形があまり整わない円形・楕円形を呈し、長軸または直径が0.7～1.5mと大小様々である。掘り込みはすり鉢状に掘り込まれるのが基本であるが、比較的浅いものが主であり、壁面は不規則で底面は凹凸が目立つ不整形な形状である。覆土は、単複様々で規則性には欠ける。

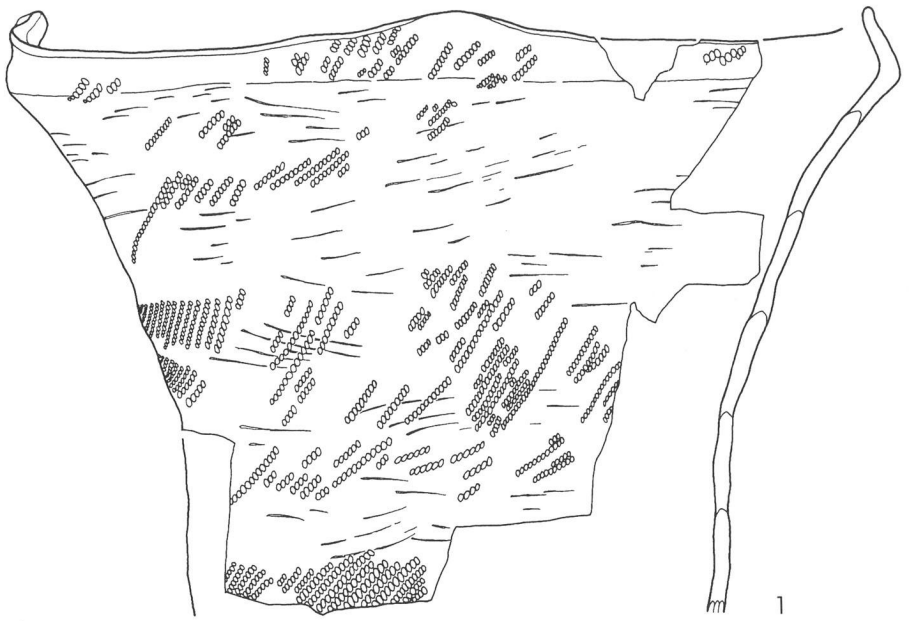
遺物（第16・17図）12・17・16号土坑より縄文土器を出土している。その他の土坑からは遺物を伴わない。17号土坑からは、上部より２個体のまとまった土器が出土している。１は、胴部から朝顔状に立ち上がる口縁部が「く」の字状に内曲し、緩やかながら４単位からなる波状口縁を呈する大型の深鉢である。外面には部分的にＬＲ縄文を斜状に施す。２は、羽状縄文を充填した後、上位に半截竹管文を幾何学的に施している。縄文時代前期後半に位置づけられると思われるが、「落し穴」土坑からこれだけまとまった遺物の伴出は珍しい。12号土坑からは、１


3号
762.8m
ロームブロック 1
7号
762.4m
17号
762.7m
4号
762.8m
1号
763.3m
カクラン
2号
762.9m
0
1m
(1:4)

第14図　土坑実測図 1


5号
762.9m
6号
762.9m
10号
761.2m
9号
761.7m
11号
12号
761.6m
13号
761.6m
14号
763.2m
カクラン
15号
762.9m
16号
763.0m
762.9m
0
1m
(1:4)

第15図　土坑実測図 2

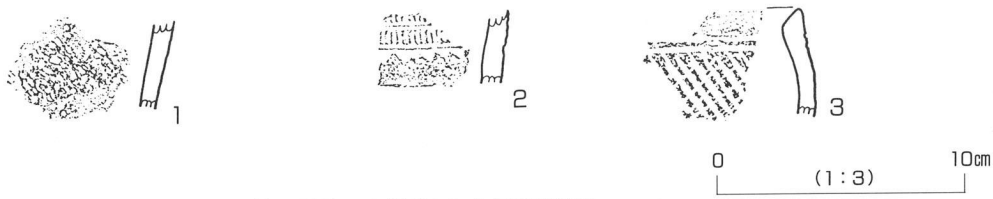


0　10cm
(1：4)

第16図　17号土坑出土土器実測図

第6表　土坑一覧表

番号	平面形	断面形	規模	覆土	締まり	粘性	備考
1	楕円形	台形	120 78 21	1層10YR3/4（暗褐色） 2層10YR4/6（褐色）　ロームブロックを10%含む	強 強	弱 中	
2	円形	長方形	163 140 28	1層10YR2/1（黒色）　ローム粒子をブロック状に2%含む 2層10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を3%含む 3層10YR4/6（褐色）　ローム粒子をブロック状に3%含む	中 強 中	中 強 中	
3	楕円形	台形	167 128 84	1層10YR2/2（黒褐色）　ローム粒子を2%含む 2層10YR2/1（黒色）　ローム粒子を3%含む 3層10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を3%含む 4層10YR2/1（黒色）　ローム粒子を10%含む 5層10YR2/1（黒色）　ローム粒子を50%以上含む 6層10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を20%含む 7層10YR4/3（鈍い黄褐色） 8層10YR6/8（明黄褐色）ローム粒子を50%以上含む	中 弱 中 弱 中 弱 強 強	強 強 中 強 中 強 強 強	落し穴
4	楕円形	不整形	168 80 33	1層10YR2/3（黒褐色）　ロームブロックを3%含む 2層10YR3/4（暗褐色）　ロームブロックを50%以上含む	中 強	中 中	
5	楕円形	台形	130 104 20	1層10YR2/3（黒褐色）　10YR3/4（暗褐色）をブロック状に5%含む 2層10YR3/4（暗褐色）　ロームブロックを10%含む	強 強	中 中	
6	楕円形	台形	140 85 37	1層10YR2/2（黒褐色）　ハードロームを2%含む 2層10YR4/6（褐色）　ハードロームを2%含む	中 中	中 中	
7	円形	二段構造	200 174 88	1層10YR3/3（暗褐色）　炭化物を1%ローム粒子を5%含む 2層10YR2/3（黒褐色）　炭化物を2%含む 3層10YR5/8（黄褐色） 4層10YR4/6（褐色）　10YR6/8（明黄褐色）を5%含む	中 強 弱 中	中 弱 弱 中	落し穴
8	楕円形	台形		1層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を3%含む 2層10YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を3%以上含む	強 中	中 中	
9	円形	半円形	72 64 36	1層10YR2/3（黒褐色） 2層10YR3/2（黒褐色）　径2～5cmの礫を5%含む	強 中	中 中	
10	円形	四角形	79 74 68	1層10YR2/2（黒褐色） 2層10YR2/1（黒色）　径0.5cmのローム粒子を5%含む 3層10YR2/2（黒褐色）　径0.5～1cmのローム粒子を10%、所々に径5cmのロームブロックを含む	中 強 強	中 強 強	
11	楕円形	台形	69 57 24	1層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を3%含む 2層10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を5%含む 3層10YR4/6（褐色）　ローム粒子を50%以上含む	中 弱 強	中 中 中	
12	楕円形	台形	90 60 48	1層10YR3/4（暗褐色） 2層10YR3/3（暗褐色） 3層10YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を30%含む	中 強	中 中	
13	楕円形	不整形	63 42 53	1層10YR2/2（黒褐色） 2層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を3%含む 3層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を5%含む 4層10YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を30%含む	強 強 強 中	弱 中 中 中	
14	不整形	不整形	107 35 26	1層10YR3/2（黒褐色）　ローム粒子を10%含む 2層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を15%含む	弱 中	中 中	
15	楕円形	台形	75 58 33	1層7.5YR3/2（黒褐色）　7.5YR2/2（黒褐色）を10%、ローム粒子を3%含む 2層10YR4/6（褐色）　ローム粒子を20%含む	弱 弱	中 強	
16	楕円形	二段構造	63 51 48	1層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を5%含む 2層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を5%含む	中 中	中 強	
17	円形	二段構造	162 155 110	1層10YR2/3（黒褐色）　炭化物を1%ローム粒子を3%含む 2層10YR2/1（黒色）　炭化物を1%ローム粒子を2%含む 3層10YR4/4（褐色）　ローム粒子を10%含む 4層10YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を30%含む 5層10YR5/8（黄褐色）　ハードローム	強 中 中 中 強	中 中 強 中 強	落し穴
18	楕円形	不整形	112 78 32	1層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を10%含む	弱	弱	

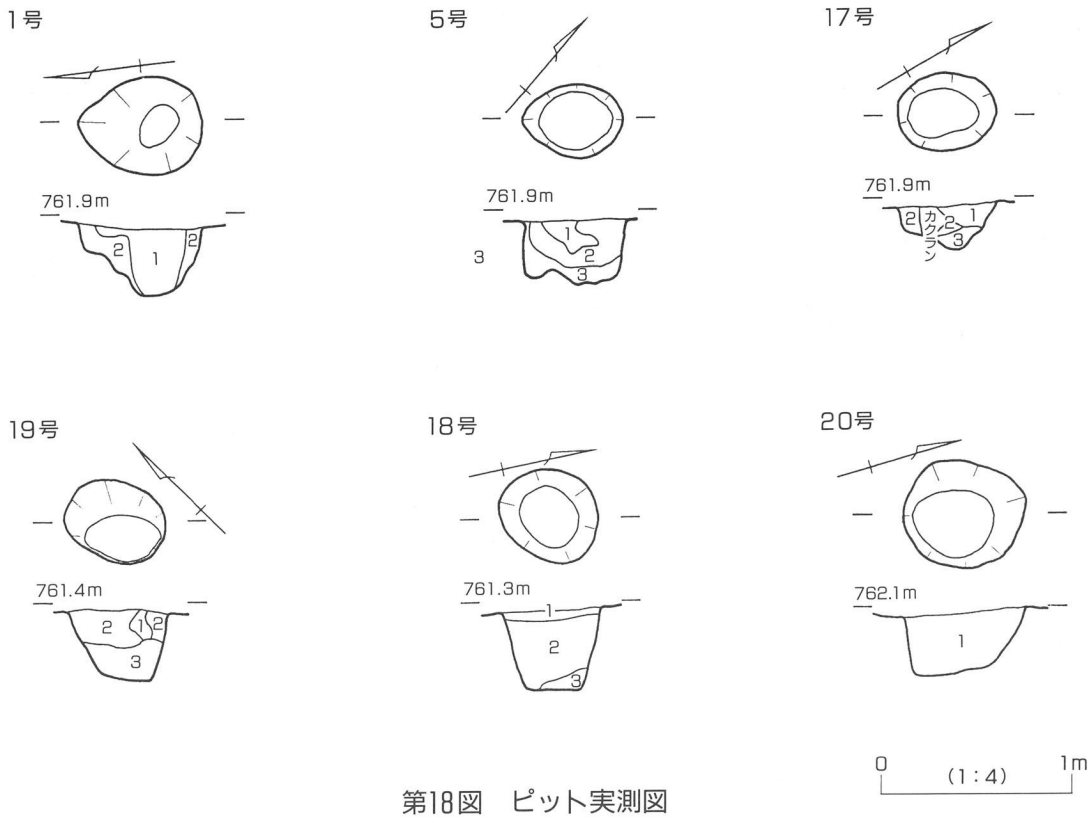


第17図　土坑出土土器拓影図

の複節縄文が施文される土器片１点が出土している。16号土坑からは、縄文時代中期初頭の半截竹管文土器片が出土している。

第４節　ピ ッ ト

掘立柱建物址の柱穴と規模・形状が近似するものをピットとして包括した。総数21基を検出したが、20号ピットのみ縄文時代中期初頭の土器片を伴出したのみで、その他からの遺物の出土はみられない。



第18図　ピット実測図

第7表　ピット一覧表

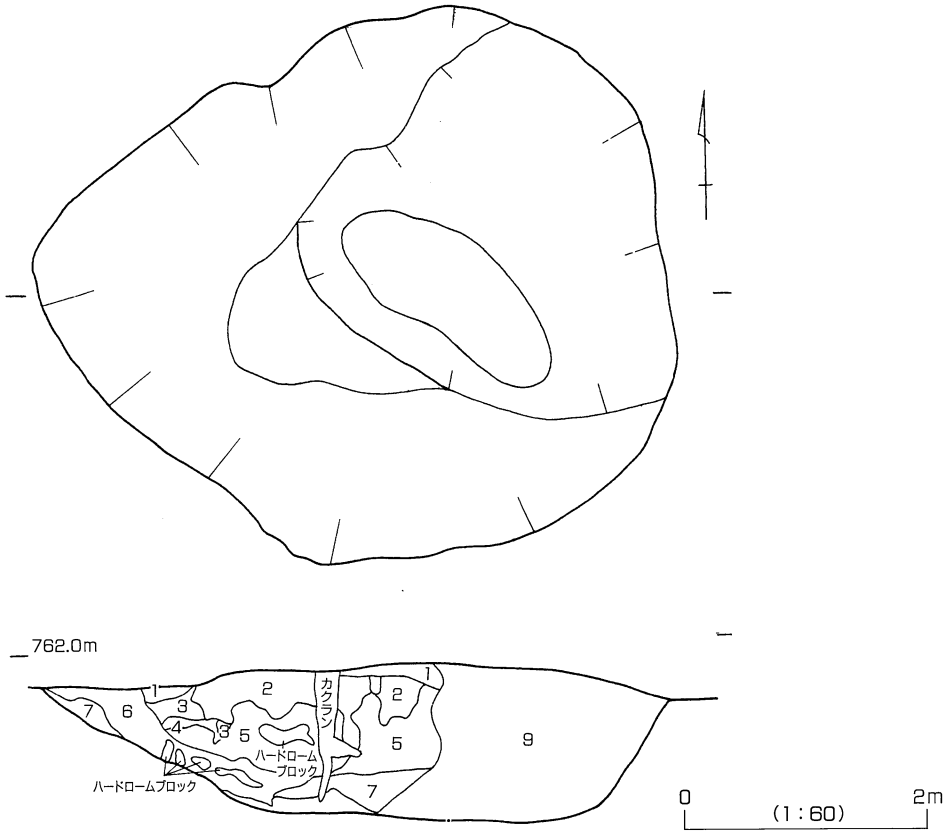
番号	平面形	断面形	規模	覆土	締まり	粘性	備考
1	楕円形		63 53	1層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を３％含む 2層10YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を50％以上含む	中 中	中 中	
2	楕円形		69 42				
3	円　形		37 37				
4	楕円形	皿　状	100 58 20	1層10YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を５％含む	強	中	
5	楕円形	四角形	53 38 34	1層10YR3/2（黒褐色） 2層10YR3/2（黒褐色）　ローム粒子を10％含む 3層10YR3/2（黒褐色）　ローム粒子を50％以上含む	強 強 強	中 中 中	
6	楕円形		49 39				
7	不整形		53 44				
8	円　形	半円形	48 42				
9	円　形	半円形	48 42 27				
10	円　形		60 47				
11	円　形		69 49				
12	円　形		32 32				
13	円　形		42 40				
14	楕円形		58 49				
15	円　形		50 36				
16	楕円形		49 25				
17	楕円形	不整形	50 42 23	1層10YR2/3（黒褐色） 2層10YR3/3（暗褐色） 3層10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子を３％含む	強 中 中	中 中 中	
18	円　形	長方形	54 46 42	1層10YR3/4（暗褐色） 2層10YR2/3（黒褐色） 3層10YR4/4（暗褐色）　ローム粒子を50％以上含む	強 強 弱	中 中 中	
19	円　形	台　形	52 41 36	1層10YR2/2（黒褐色） 2層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を３％含む 3層10YR3/4（暗褐色）　ローム粒子を30％含む	弱 弱 強	中 中 中	
20	円　形	台　形	60 56 32	1層10YR2/3（黒褐色）　ローム粒子を３％、炭化物を２％含む	中	中	
21	不整形		97 22				

第５節　ロームマウンド

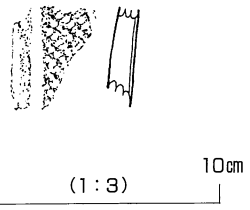
１号ロームマウンド（第19図）

遺構　Ｄ－４・５、Ｅ－４・５グリッドに位置する。やや不整形な楕円形のプラン形状を呈し、東西5.6ｍの南北4.3ｍで、マウンド確認箇所から深さ1.3ｍを測る。マウンド部はソフトローム（テフラ）を主体とする黄褐色土で構成されるが、その中にブロック状のハードロームが混在する。遺構上面作業時に地山との境界が不明確で、マウンド部の削平を行ってしまったが、僅かな盛り上がりを確認できた。

遺物　上部覆土中から縄文中期後葉の土器片１点を出土している。



１層：10YR5/4（にぶい黄褐色）	10YR4/3を20％含む	
２層：10YR5/6（黄褐色）	ローム粒子を10％含む	
３層：10YR5/6（黄褐色）	ローム粒子を10％含むハードローム	
４層：10YR4/4（褐色）	10YR5/6のローム粒子を50％以上含む	
５層：10YR5/6（黄褐色）	ローム粒子を10％含むハードローム	
６層：10YR3/4（暗褐色）	ローム粒子を40％含む	
７層：10YR5/6（黄褐色）	ローム粒子を10％含む粘性の弱いハードローム 径0.5cmの礫を３％含む	
８層：10YR5/6（黄褐色）	ローム粒子を10％含む 径0.5cm以下の礫を５％含む	
９層：	径0.5～10cmの礫及び砂粒で構成される	

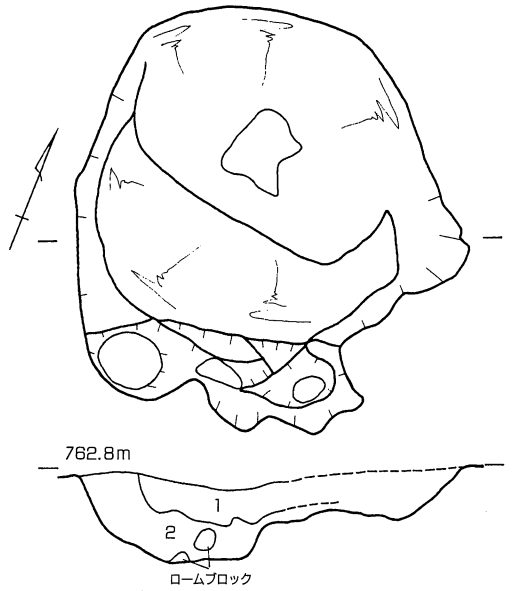


第19図　１号ロームマウンド実測図及び出土土器拓影図

2号ロームマウンド（第20図）

遺構　C－3・4グリッドに位置する。南北3.4m東西3.1mで深さ0.7mを測り、不整円形のプラン形状を呈する。当初は土坑としての掘削を始めたが、上部にロームを主体とする褐色土の確認で2号ロームマウンドして認定した。また、縁から下部にかけて褐色土が堆積する。底面は凹凸が激しく、マウンドの盛り上がりは未確認である。

尚、遺物の出土はなかった。



1層：10YR5/6（黄褐色）
2層：7.5YR4/4（褐色）

0　1m
(1：60)

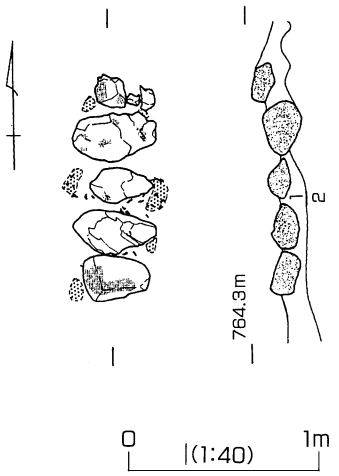
第20図　2号ロームマウンド実測図

第6節　火葬墓

1号火葬墓（第21図）

遺構　G－5グリッドに位置する。長さ1.2mの範囲に、幅40cm前後の珪岩・硬砂岩・粘板岩等の自然石を石材として5点を用い、比較的平坦な面を上へ向け、ほぼN－0°－S方向を主軸に配置される。石の表面は、全体的に赤褐色に変色しひび割れも観られ、表面には油脂と思われる物質を焼いた時にみられる、黒褐色の染みが部分的に付着する。また石の検出面を中心に、焼土と炭化木片、そして粉砕した骨片がまばらに出土している。これらの検出状況から、火葬墓であろうと判断した。

本遺構の検出状況は、石材の一部が基本土層の第Ⅴ層上部に達する物も見られるが、第Ⅱ層はなくⅢ層掘削中に確認しており、層位からは他の各遺構より新規の構築時期である事は明確である。しかし、骨片以外の遺物はまったく出土しておらず、具体的な時期判定を下す事はできない。



0　1m
(1:40)

1層：10YR2/3（黒褐色）
焼土を5％、赤褐色土（5YR4/4）を25%、炭化物と骨片をまばらに含む
2層：10YR5/4（にぶい黄褐色）
基本土層第Ⅴ層に相当

第21図　火葬墓実測図

第V章　ま　と　め

今回の調査では、前述のとおり縄文時代、平安時代の多数の遺構・遺物が検出された。本遺跡は、深沢川の南側河岸に帯状に広がる遺跡群に属し、特に代表される堂地遺跡との継続関係を確認できた事は大きな成果であったと言える。本書のまとめとして、今回の成果について若干の考察と、今後の課題についてつけ加えておきたい。

縄文時代の遺構としては、土坑・ピットそしてロームマウンドが充てられようが、その大多数が築造・使用時期を示すまとまった遺物を出土する遺構が少なく、わずか数点の土器片を覆土に包含するだけではすべて本時期にあてはめられない。かつての堂地遺跡狐窪地籍の調査（昭和48年度）では総数362基の土坑を検出し、縄文時代前期後半から後・晩期、平安時代、中世の遺物を出土するものも見られる。しかし、3・7・17号土坑に観られる「落し穴」的な機能を有する土坑はほとんどなく、上記の土坑群とは関連性が薄い。また17号土坑のように使用時期を判別し得る、まとまった土器を伴う「落し穴」土坑の存在はあまり類例が少なく、周辺部における縄文前期後半期の集落跡の存在と、同期の狩猟域の広がりが予測される。

奈良・平安時代の遺構としては、出土遺物からほぼ8世紀末から9世紀前半に当たる住居址2軒と掘立柱建物址1棟を検出し、狐窪地区からの集落域が継続することが言える。調査面積と過去の検出例の割合に対し、西方に向けて減少傾向との見方もあるが、各遺構が調査区の中央より南側に集中することから、まだその南側の未調査地一帯に集落域が広がる可能性を示唆できよう。

箕輪町西部を南北に流れる西天竜用幹線水路を境に、東は土地改良を進めた水田地帯、西は自然地形を利用した畑地帯が広がる。今回の調査箇所は後者に属することもあって、微妙な地形の起伏の見極めと連日の猛暑も手伝ってか、遺構の検出に困難を要した。しかし、検出した各遺構の保存状況が良く、今後第2第3次墓地造成計画の実施における本遺跡の再調査により、奈良・平安時代の集落の広がり、縄文時代の狩猟場としての状況、また新たな発見と成果に大きな期待が膨らむ。また、本地域一帯がこれらの計画以外はさほど大きな開発計画もなく、遺跡の保護・保存に極めて喜ばしいと言えよう。

なお末筆にあたり、本事業に多大なご理解とご協力をいただいた上伊那西天竜土地改良区並びに箕輪町土地開発公社の関係諸機関を始め、松島、大出、八乙女の各地域の皆様、そして猛暑の中、直接調査にご尽力いただいた調査団の皆様に、本書の刊行をもって改めてお礼を申し上げたい。

参考・引用文献　（著者名50音順）

伊那市教育委員会　1968　『伊那・福島遺跡』

伊那市教育委員会　1983　『鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡』

（財）東京都埋蔵文化財センター1983　『多摩ニュータウン遺跡』

笹沢　浩　1975　「長野県下出土の須恵器」信濃26-9・11

長野県教育委員会　1974　48『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』箕輪町

長野県教育委員会　1973　48『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』辰野町その２

長野県教育委員会　1990　『中央自動車道長野線埋蔵発掘調査報告書４」総論編

長野県考古学会　1987　「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」長野県考古学会誌55.56

長野県史刊行会　1981　長野県史　考古資料編　全１巻（１）　遺跡地名表

長野県史刊行会　1985　長野県史　考古資料編　全１巻（２）　中・南信版

長野県史刊行会　1988　長野県史　考古資料編　全１巻（３）　遺構・遺物

西本豊弘　1984　「狩猟・魚撈の場と遺跡」季刊考古学第７号

箕輪町誌編纂刊行委員会　1976　箕輪町誌　第１巻　自然・現代編

箕輪町誌編纂刊行委員会　1986　箕輪町誌　第２巻　歴史編

箕輪町教育委員会　1974　『八乙女五輪遺跡』

箕輪町教育委員会　1989　『堂地・中道遺跡』

箕輪町教育委員会　1990　『丸山遺跡』

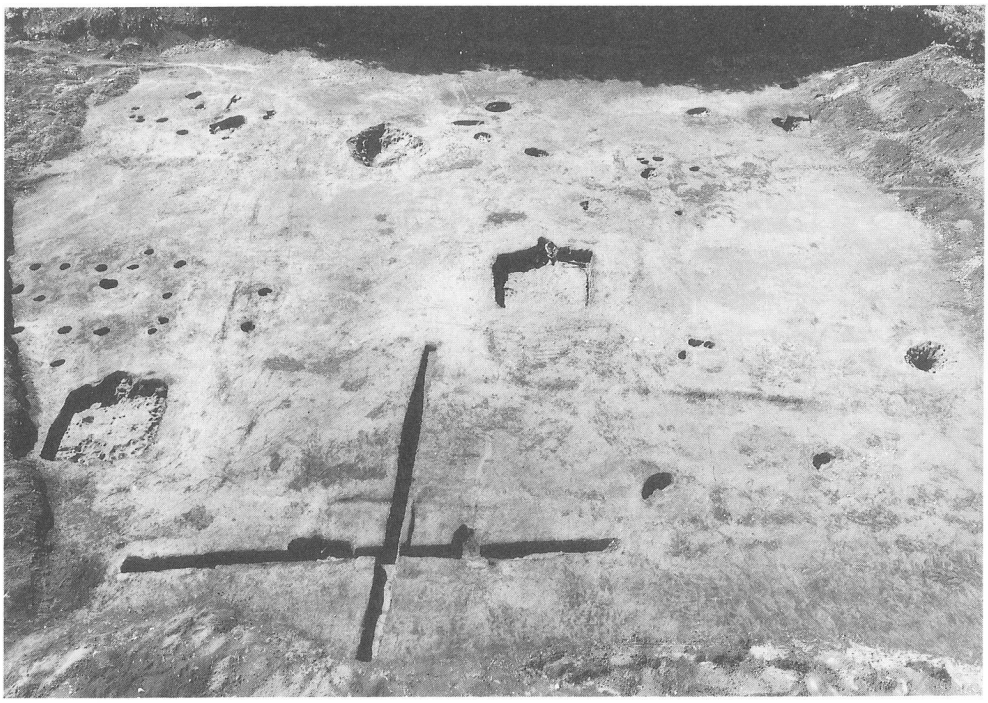
箕輪町教育委員会　1993　『北田遺跡』

箕輪町教育委員会　1993　『大垣外遺跡』第２次調査

村田文夫　1982　「おとし穴」季刊考古学創刊号

図　　版

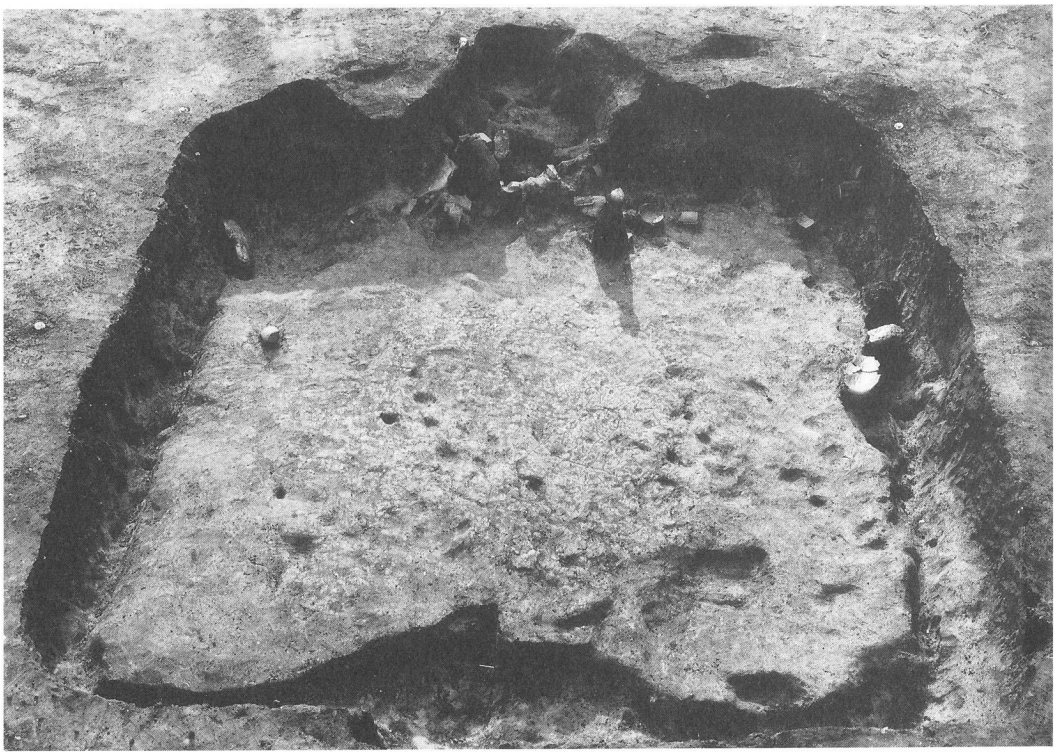
調査地近景（調査前、南東より）



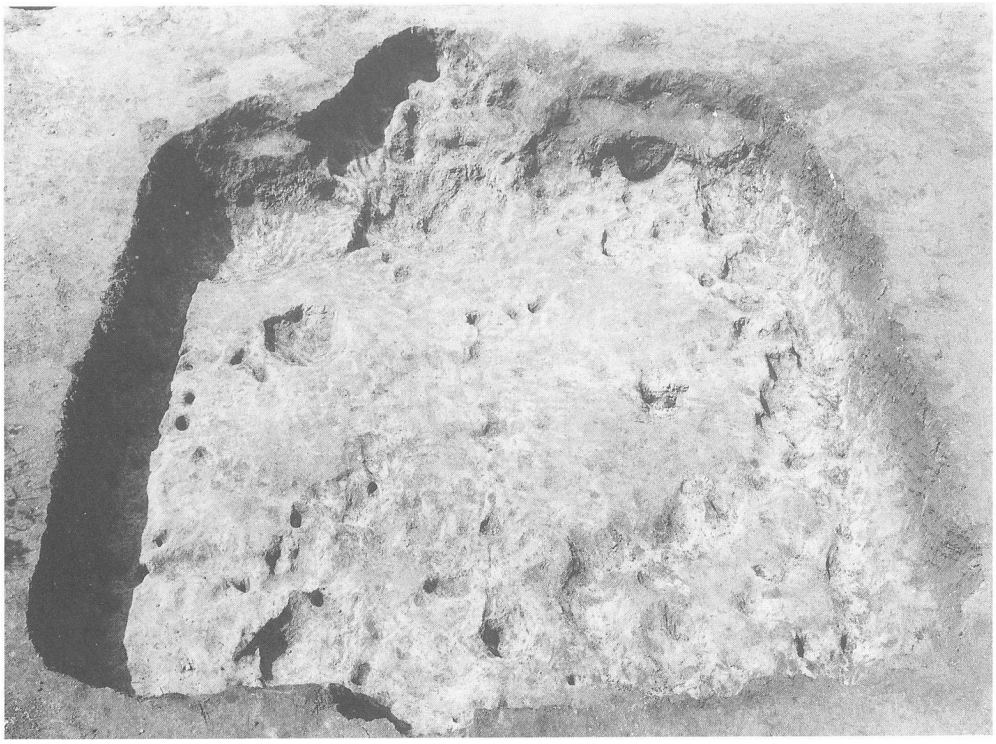
調査地鳥観（東より）

図版2

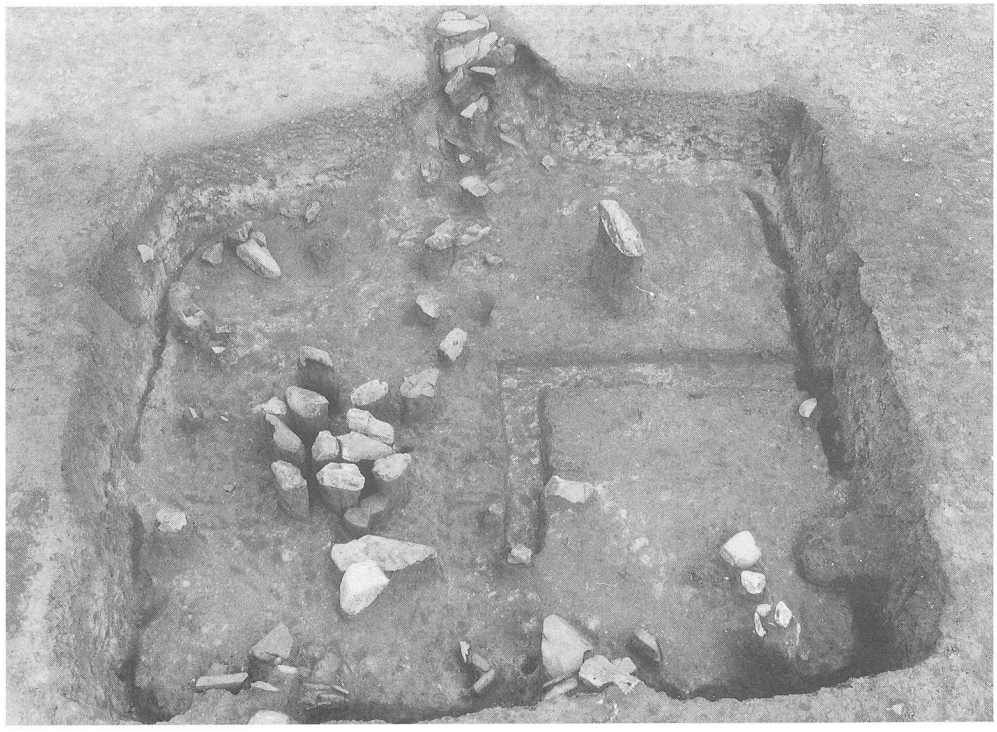
土層堆積状況



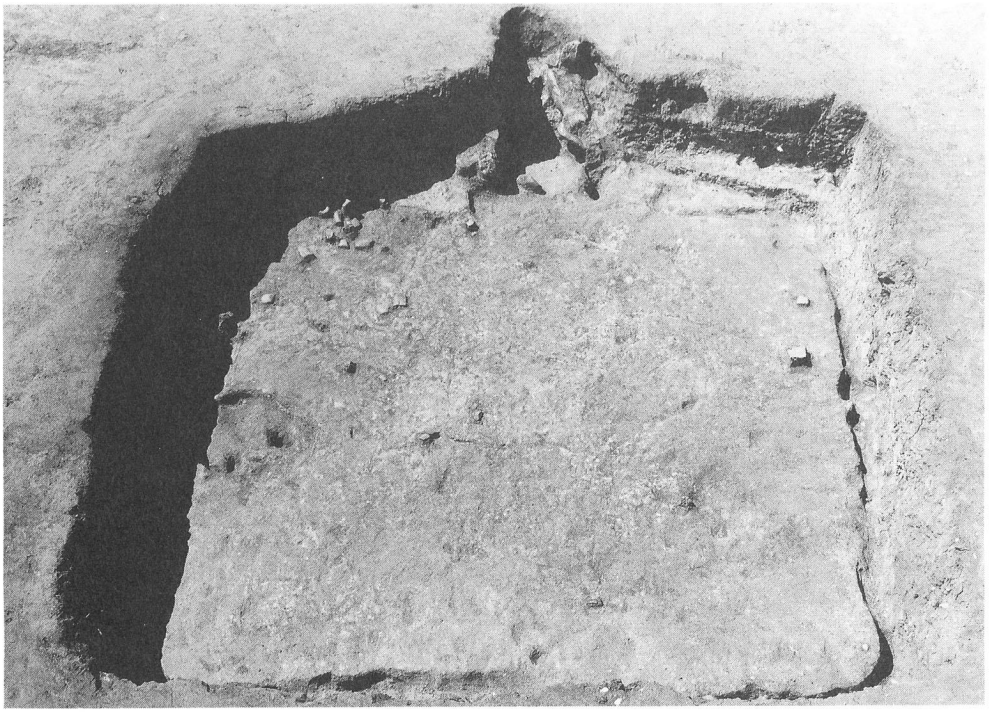
1号住居址



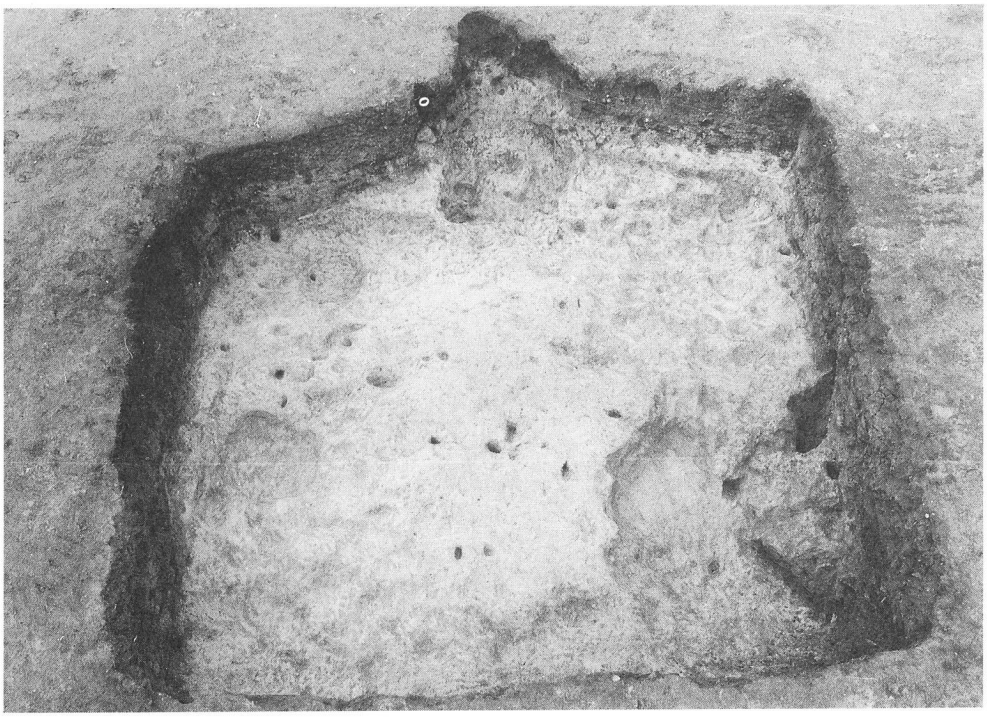
1号住居址掘り方



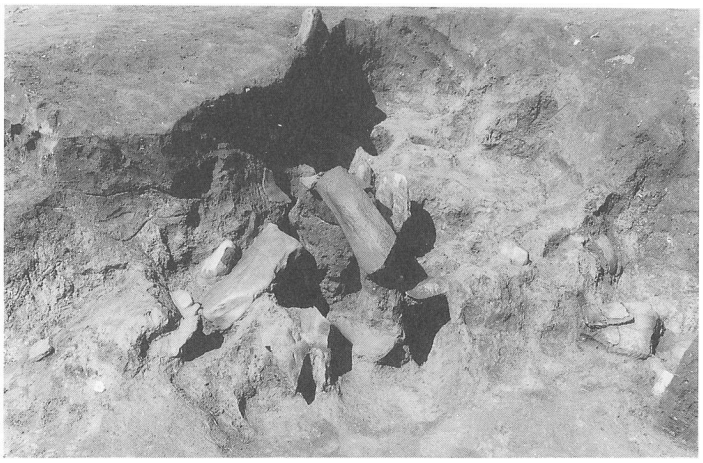
2号住居址



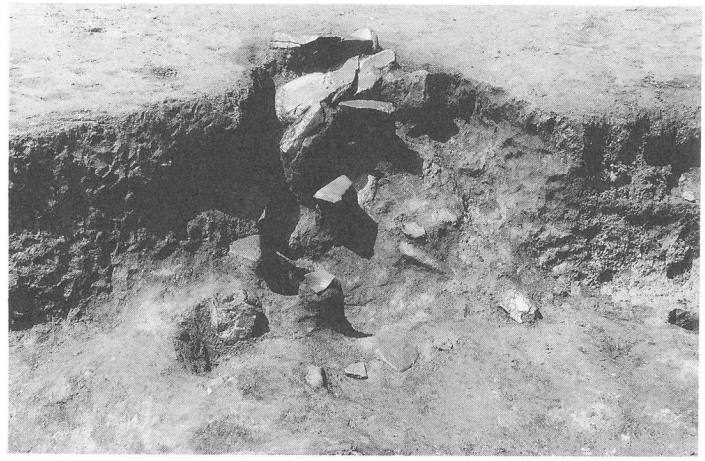
2号住居址（拡張前）



2号住居址掘り方



1号住居址カマド



2号住居址カマド1（出土状況）

2号住居址カマド2（内部状況）

図版6

10号土坑

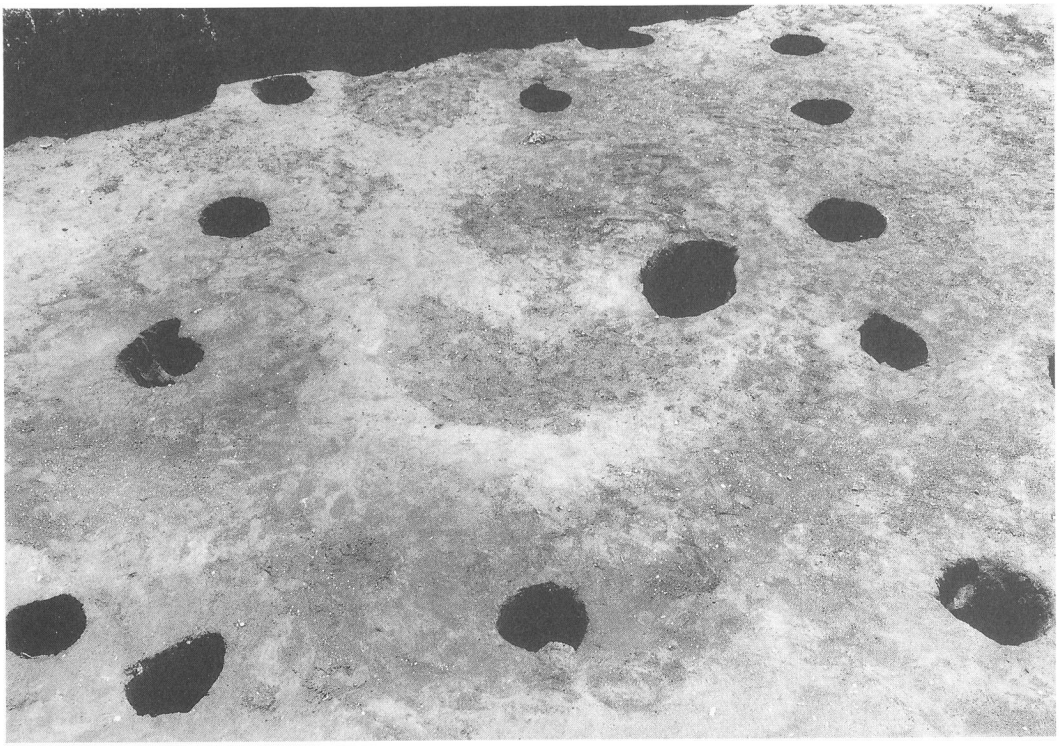
7号土坑

3号土坑

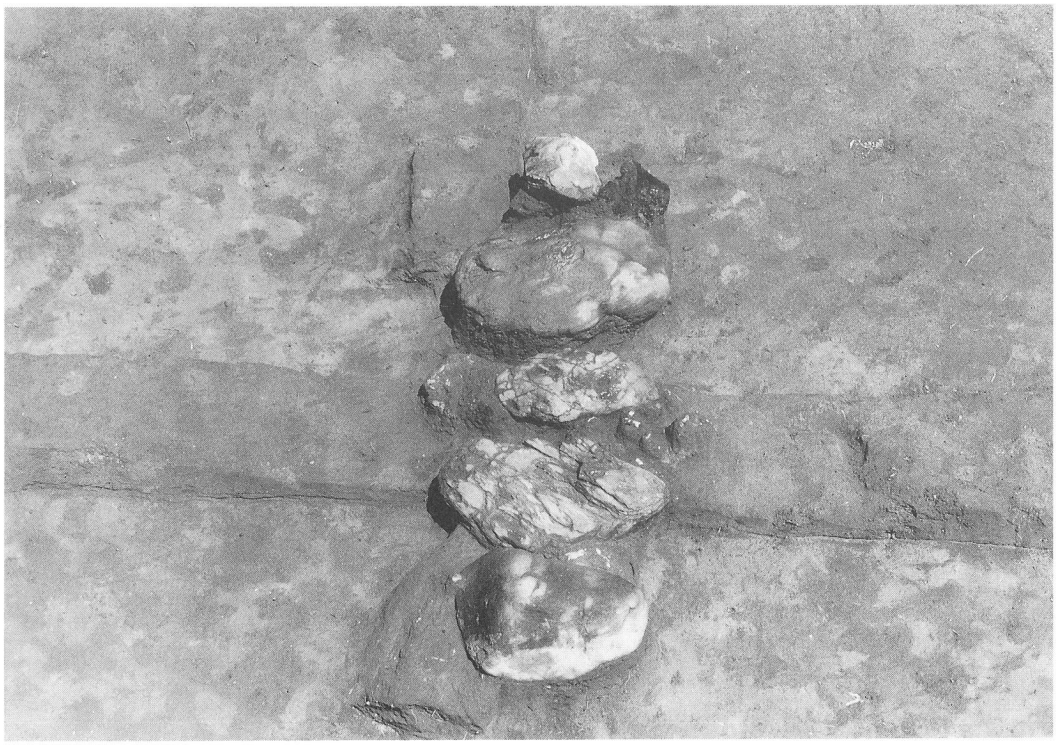
17号土坑出土状況

17号土坑

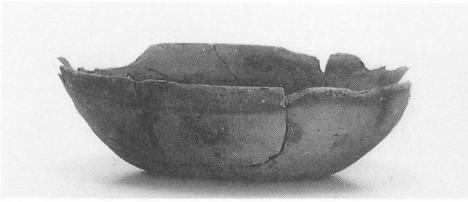
1号ロームマウンド断面

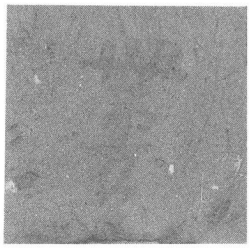


1号掘立柱建物址



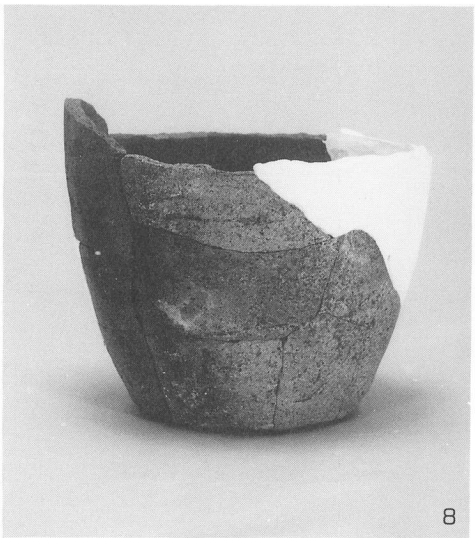
火　葬　墓



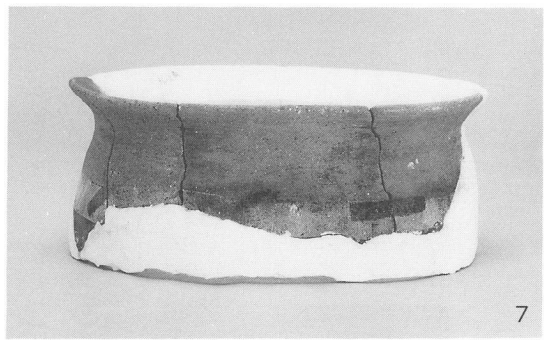


1

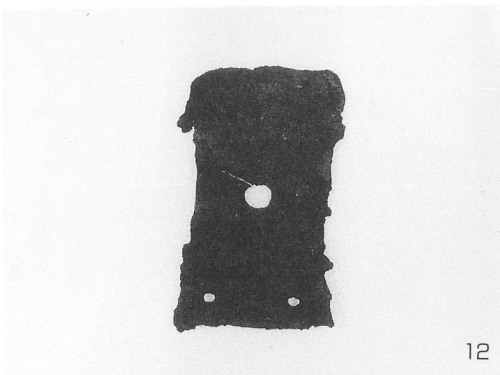
6



8



7



12

1号住居址出土土器、鉄器

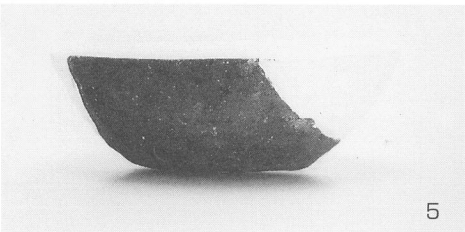
図版10

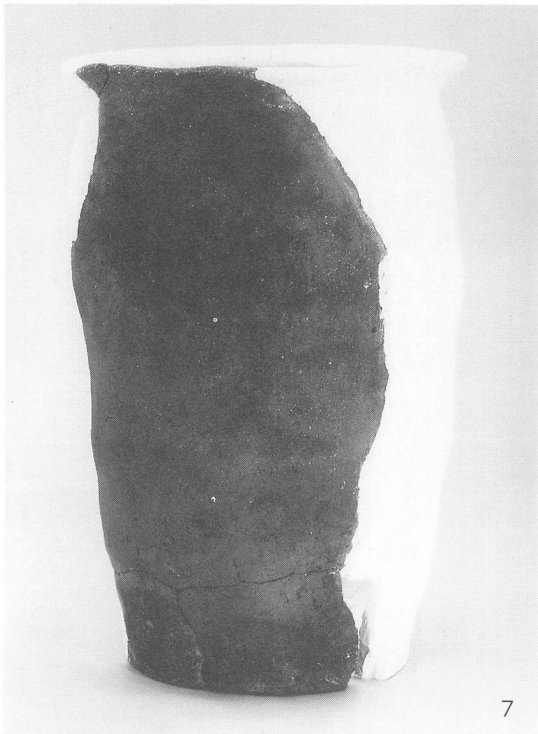
1

2

4

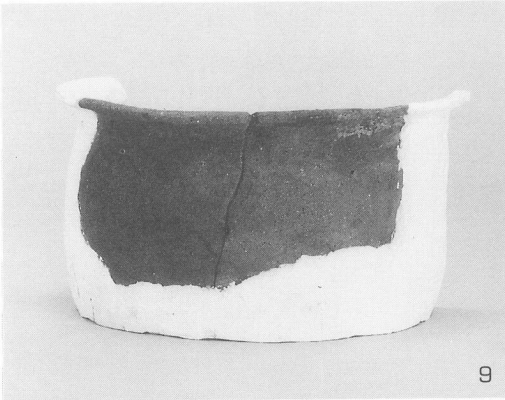
3

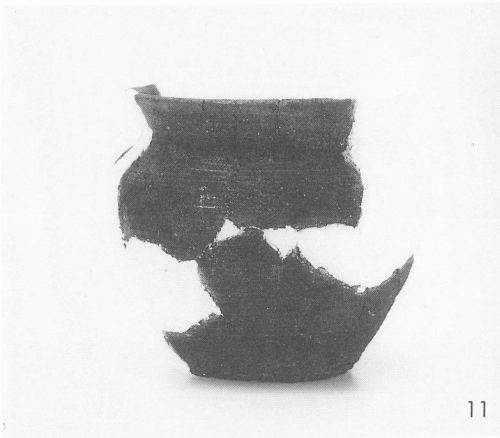

5

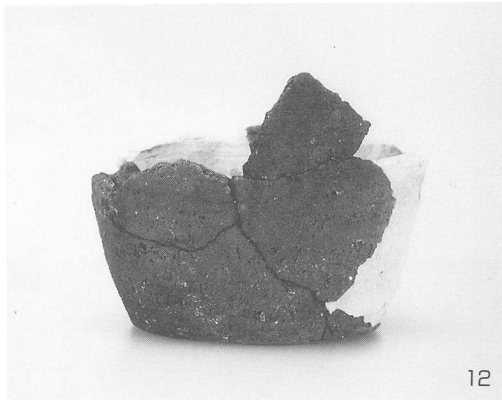

7

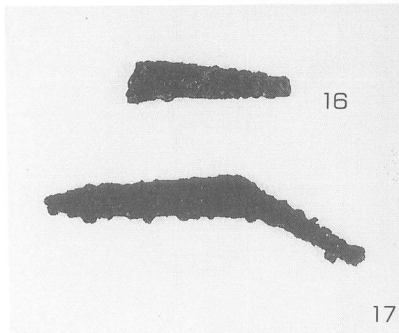
8

2号住居址出土土器 1





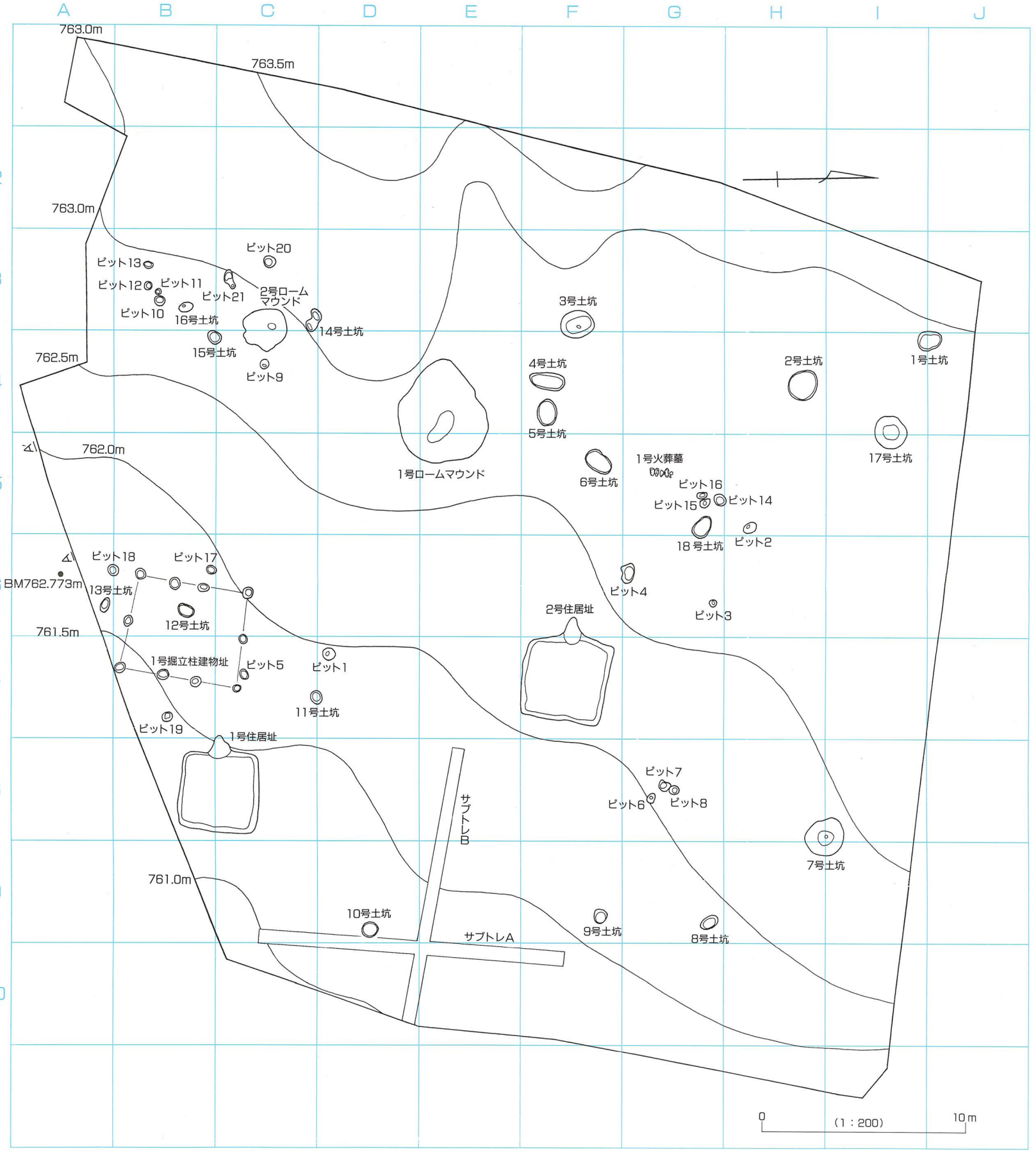




2号住居址出土土器 2、鉄器

17号土坑出土土器

調査協力者


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
763.0m
763.5m
763.0m
762.5m
762.0m
761.5m
761.0m
BM762.773m
ピット20
ピット13
ピット12
ピット11
ピット21
2号ローム
マウンド
ピット10
16号土坑
14号土坑
15号土坑
ピット9
3号土坑
4号土坑
5号土坑
2号土坑
1号土坑
17号土坑
1号ロームマウンド
6号土坑
1号火葬墓
ピット16
ピット15
ピット14
18号土坑
ピット2
ピット18
ピット17
13号土坑
12号土坑
ピット4
ピット3
2号住居址
1号掘立柱建物址
ピット5
ピット1
11号土坑
ピット19
1号住居址
ピット7
ピット6
ピット8
サブトレB
7号土坑
10号土坑
サブトレA
9号土坑
8号土坑
0
(1：200)
10m

付図1　全　体　図

報告書抄録

ふりがな	まつしまおおはらいせき
書名	松島大原遺跡
副書名	平成６年度箕輪町土地開発公社公園墓地造成工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
著者名	赤松　茂・根橋とし子
編集機関	箕輪町教育委員会
所在地	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,298番地　　ＴＥＬ0265-79-3111
発行年月日	1995年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まつしまおおはら 松島大原	ながのけんかみいなぐん 長野県上伊那郡 みのわまちおおあざなかみのわ 箕輪町大字中箕輪 11,217番地３他			35度 55分 25秒	137度 58分 10秒	19940718～ 19941007	4,000㎡	箕輪町土地開発公社 公園墓地造成工事

所有遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松島大原	集落址	縄文前期 縄文中期 奈良～平安 近・現代？	竪穴式住居址　２棟 掘立建物址　１棟 土坑　18基 ピット　21基 土坑　２基 ロームマウンド　２基 火葬墓　１基	縄文土器 土師器 須恵器 打製石斧 黒耀石 板状鉄器 刀子？ 鉄滓	昭和46年に県教育委員会（中央道建設）、同62・64年に町教育委員会（県道沢尻箕輪線建設）が近接する堂地遺跡の緊急発掘調査を実施している。地形の並びから、上記遺跡と本遺跡は、同遺跡群に属すると考えられる。

松 島 大 原 遺 跡

平成６年度箕輪町土地開発公社公園墓地造成
工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成７年３月30日　印刷
平成７年３月30日　発行

発行所　長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

印刷所　（有）工藤写植　　箕輪町